

# 乳幼児期の貧困と保育

同志社大学社会福祉教育・研究支援センター

2016年7月30日（土）

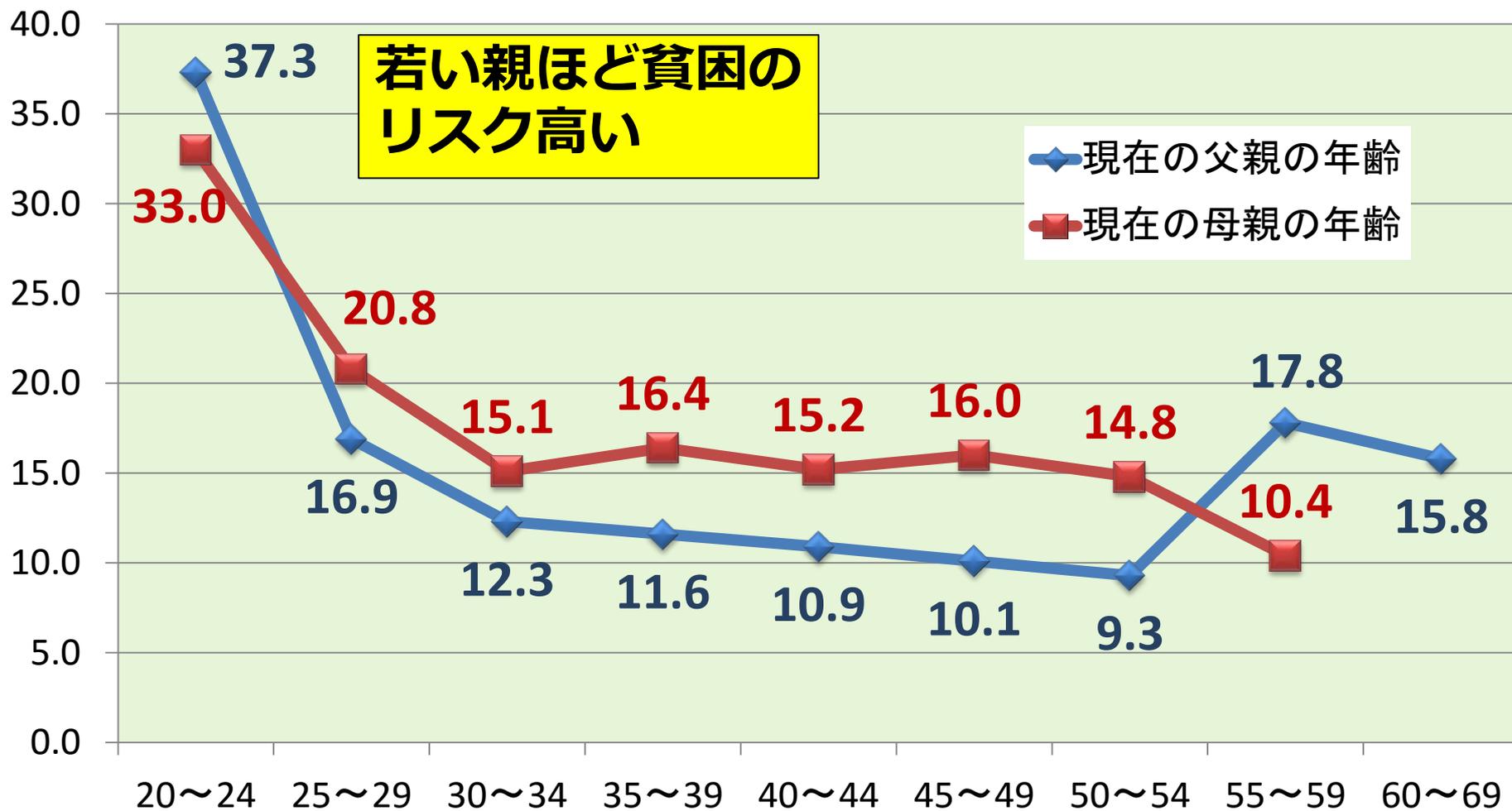
長崎大学教育学部 小西祐馬

# 流れ

1. 「子どもの貧困」について乳幼児／保育の視点から捉える
2. 乳幼児とその家族が直面している貧困の現状を明らかにする
3. 貧困の解決に向けて保育はどのような役割を果たすべきか、果たす可能性があるのか

(※乳幼児期の貧困とは何か…??)

# 父親・母親の年齢層別 貧困率 (2012)



【出所】「阿部彩(2014)「相対的貧困率の動向:2006、2009、2012年」貧困統計ホームページ」

# 最も深刻な影響をもたらす「乳幼児期の貧困」

- 「人間形成の重要な時期である子ども期」のなかでも乳幼児期は最重要の時期
- 欧米の調査研究によって、他の発達段階における貧困と比較したところ、どの年代よりも乳幼児期に貧困であるということが、子どものその後のライフチャンスを最も深刻に脅かし、おとなになったときにも貧困に陥ってしまうという「貧困の世代的再生産」を引き起こす可能性が高いと明らかに
- 発達の視点から貧困を捉えた際、子どものその後の成長に対して最も高いリスクをもたらすのが「乳幼児期の貧困」

## エスピン-アンデルセン『アンデルセン、福祉を語る』

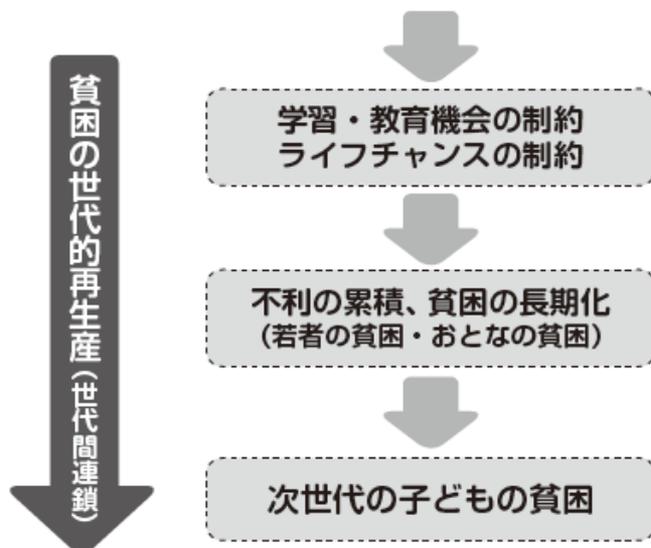
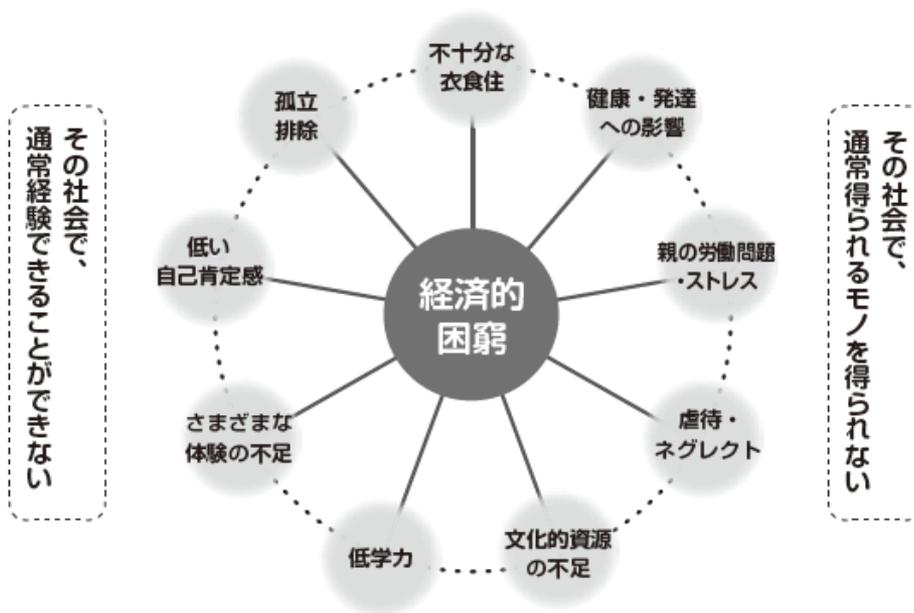
「就学以前の段階で社会的相続に関する重要なメカニズムが埋め込まれている。多くの子どもたちにとって**就学以前とは、彼らがひたすら家庭環境に依存する、最も「民営化」されている時期**である。事実、ほとんどの教師は、子どもたちの入学初日から、子どもの入学前の準備が非常に不平等であることを悟る。学校には、より一般的に言えば教育制度には、こうした溝を埋め合わせるための、独自の手段はほとんど付与されていない。」（G・エスピン-アンデルセン『アンデルセン、福祉を語る』NTT出版、2008年、64頁）

「実行すべき政策とは、乳幼児の時期や、とくに**家庭内に重要なメカニズムが潜んでいる**という前提から出発して、**子どもの人生にできる限りよいチャンスを与えることができるように、家族を支援する方策を模索することである。**（生物学的遺伝とは対照的に）**社会的相続というメカニズムがしつこく作用することが根源的な問題である。**」（同書、93頁）

- 日本の対応：乳幼児期の貧困問題の解決に着手するところか、「保育に欠ける」子どもが保育所に入れず、子どもの数が35年連続で減少している国
- 先進国で最も子どもにお金を使わない国
- 子どもの貧困率と相対的所得ギャップが国際的にみても高いのは、雇用環境の問題であると同時に、社会保障の不備
  - 「所得再分配前」と「所得再分配後」とで子どもの貧困率の減少度が世界で最も小さい先進国で、社会保障が適切に機能していない
- 高所得層と低所得層の格差を是正する機能がまったく働いていない
- 影響は、乳幼児を育てる家族にも広がっているのでは

# 子どもの貧困イメージ図

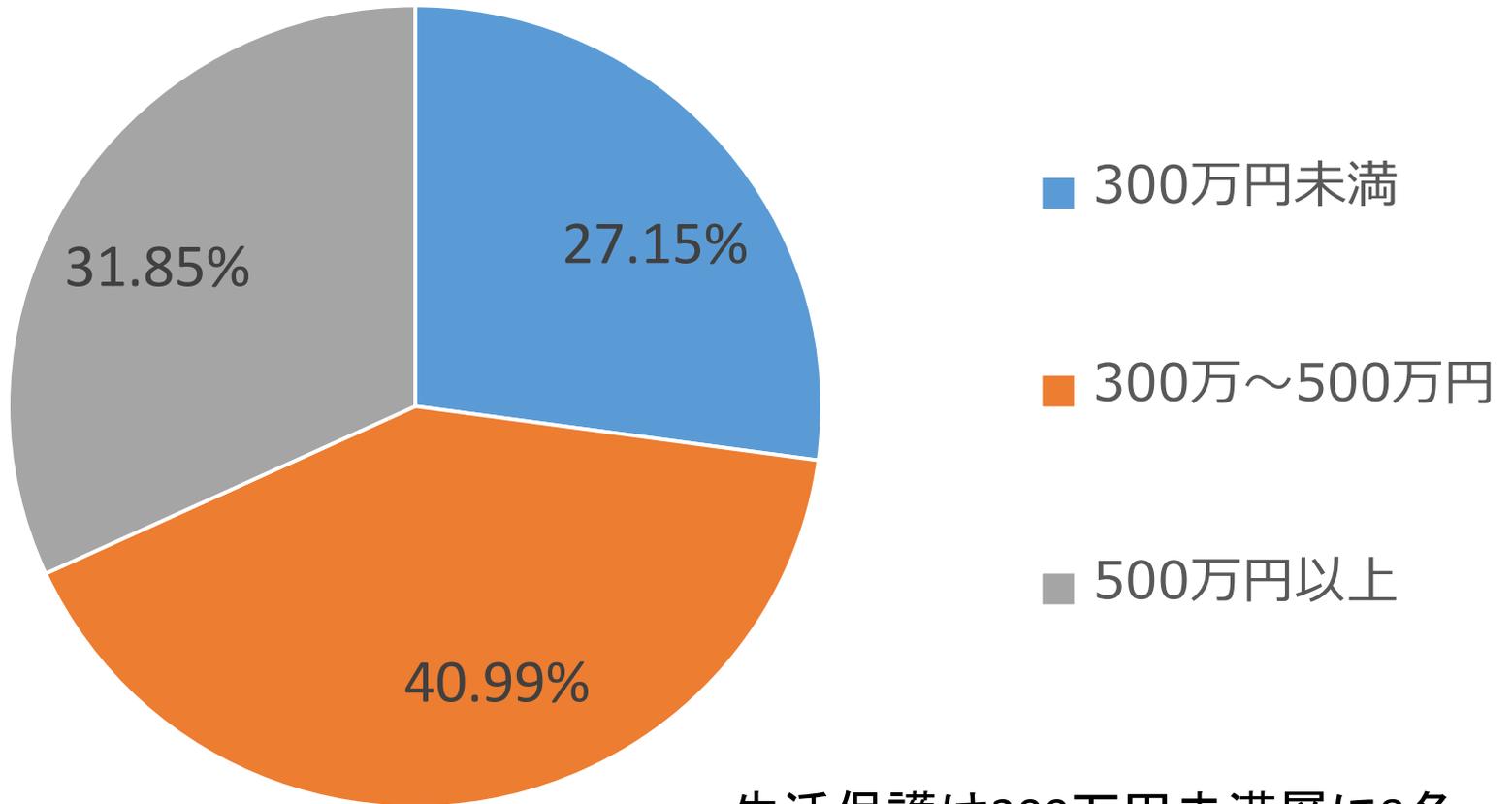
## 複合的困難・累積する不利



# 保育所の保護者へのアンケート調査

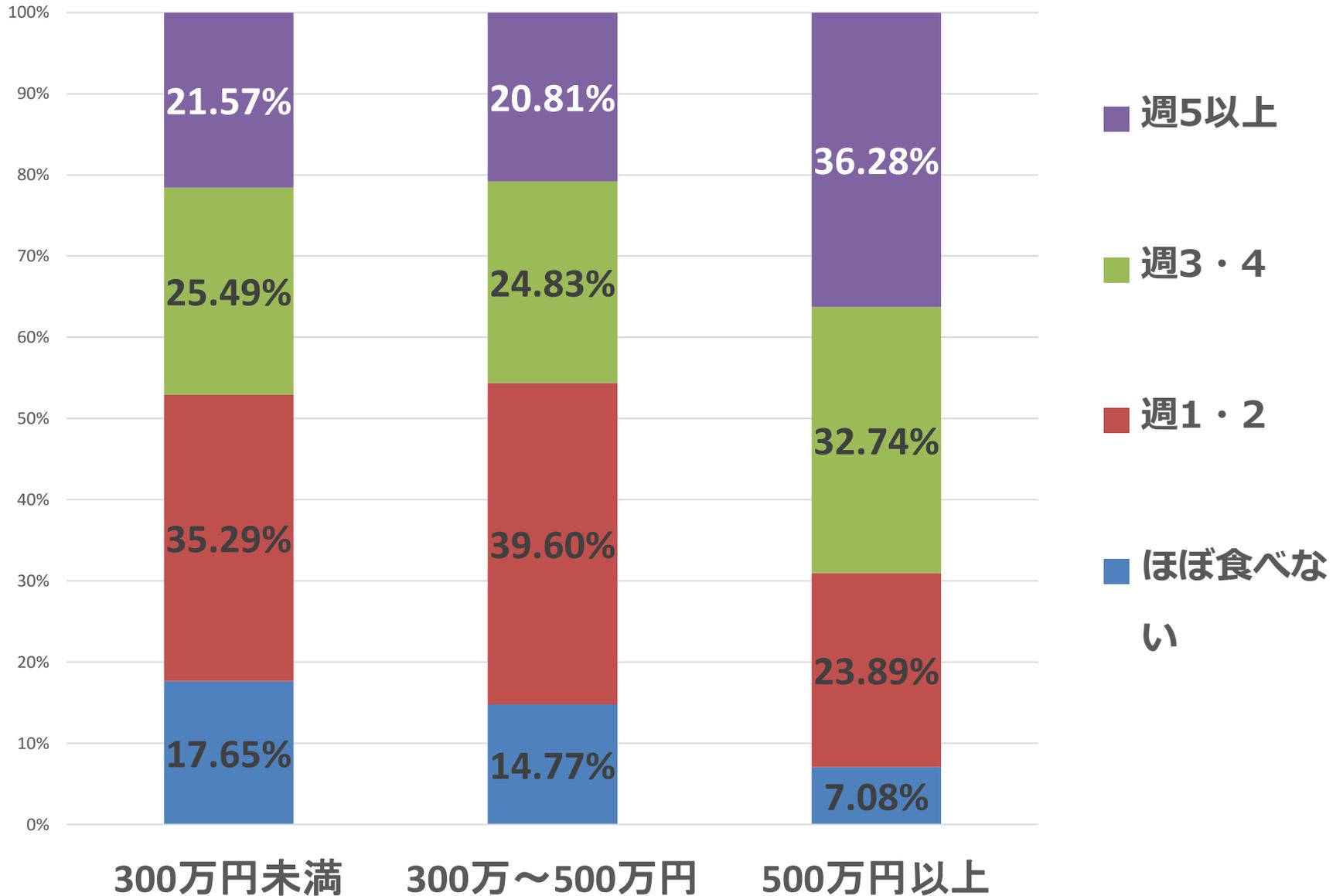
- ◆ 私立保育所 2、公立保育所 8
- ◆ 保育所を通して配布・回収
- ◆ 調査時期は2014年12月～2015年2月
- ◆ 回収数420（回収率57.5%）、有効回答数405（有効回答率55.4%）
- ◆ 8ページにわたる調査票
- ◆ 「養育環境の不平等」に関する調査

# 収入分布

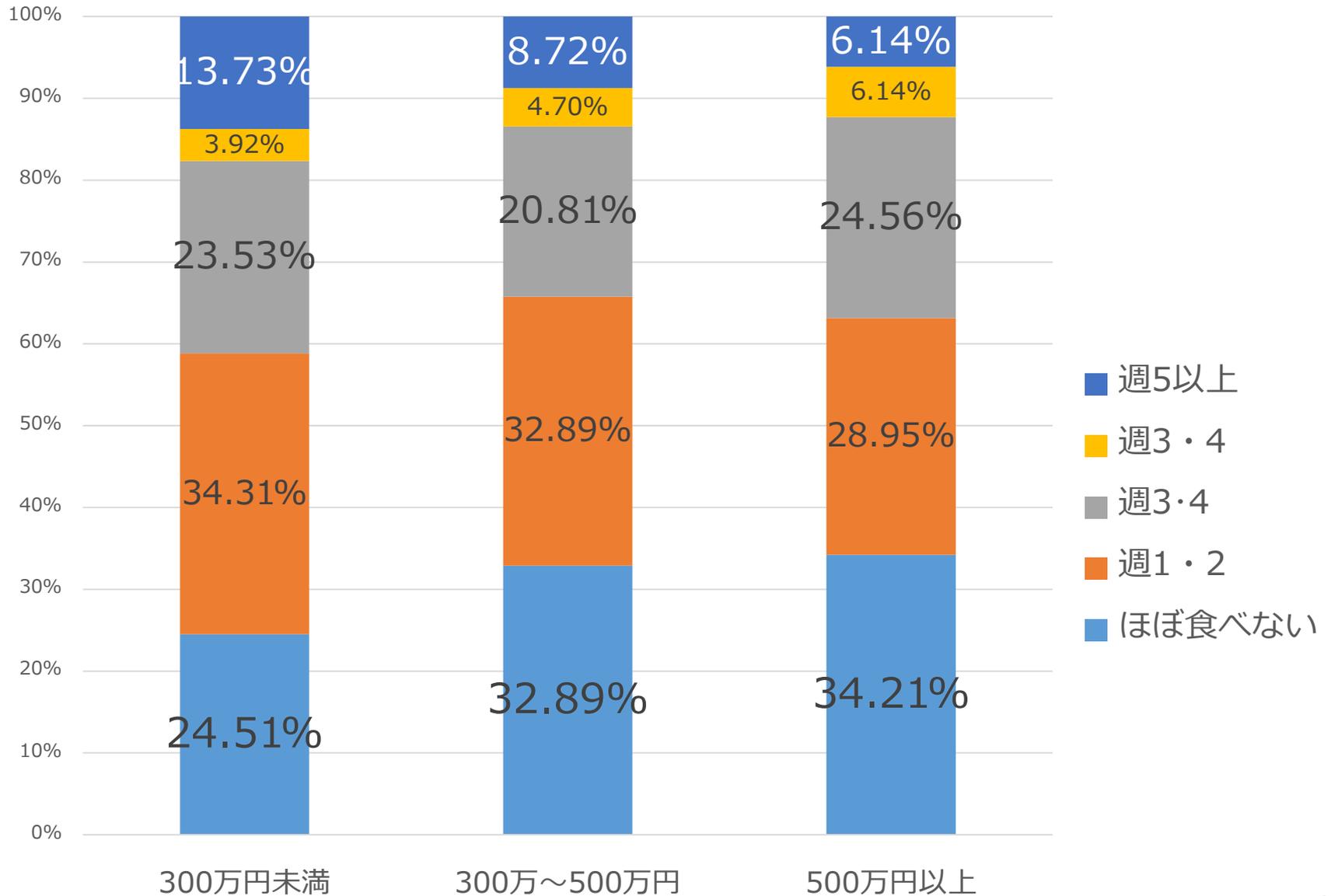


生活保護は300万円未満層に8名、  
300～500万円層に2名

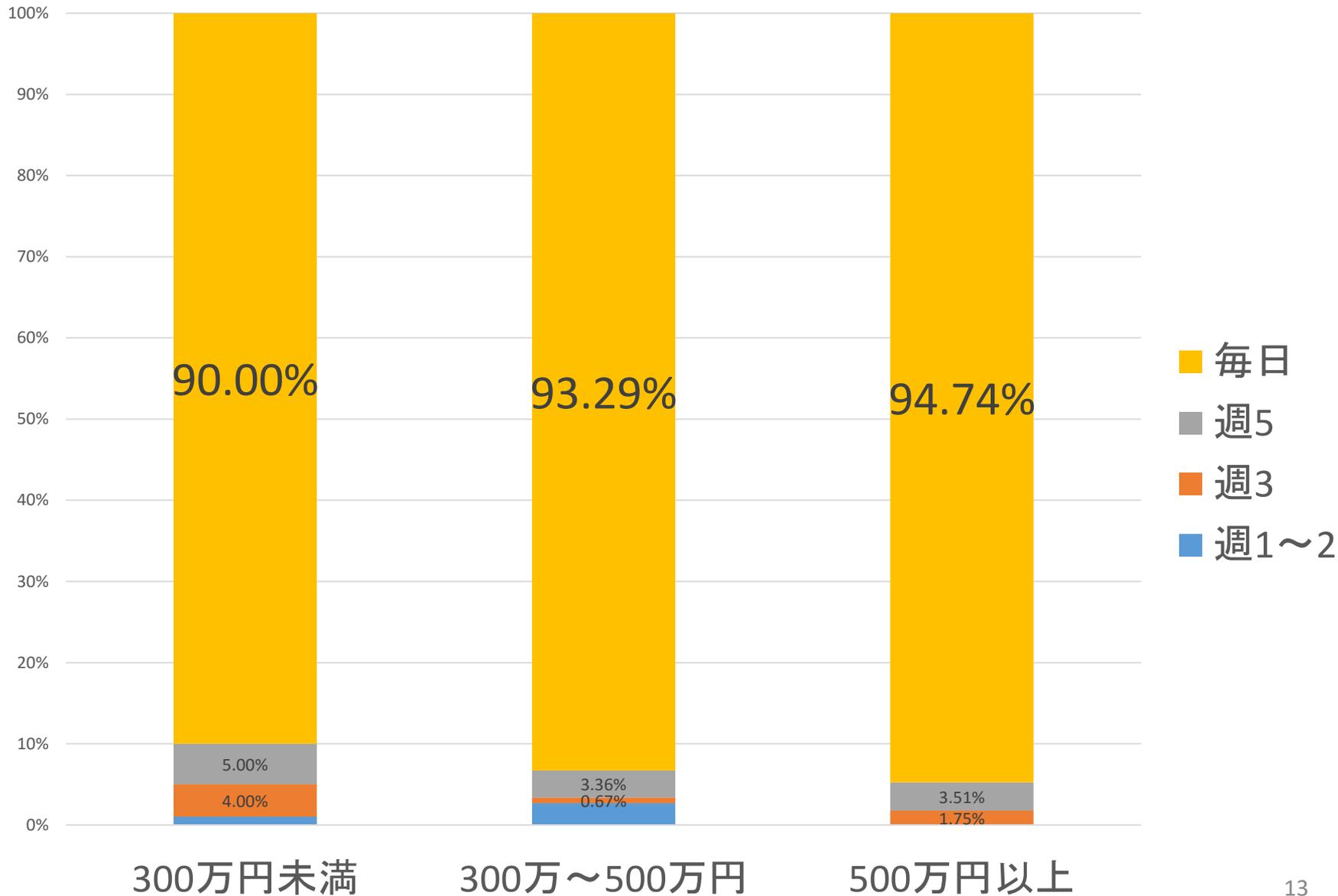
# 子どもが家でくだものを食べる頻度



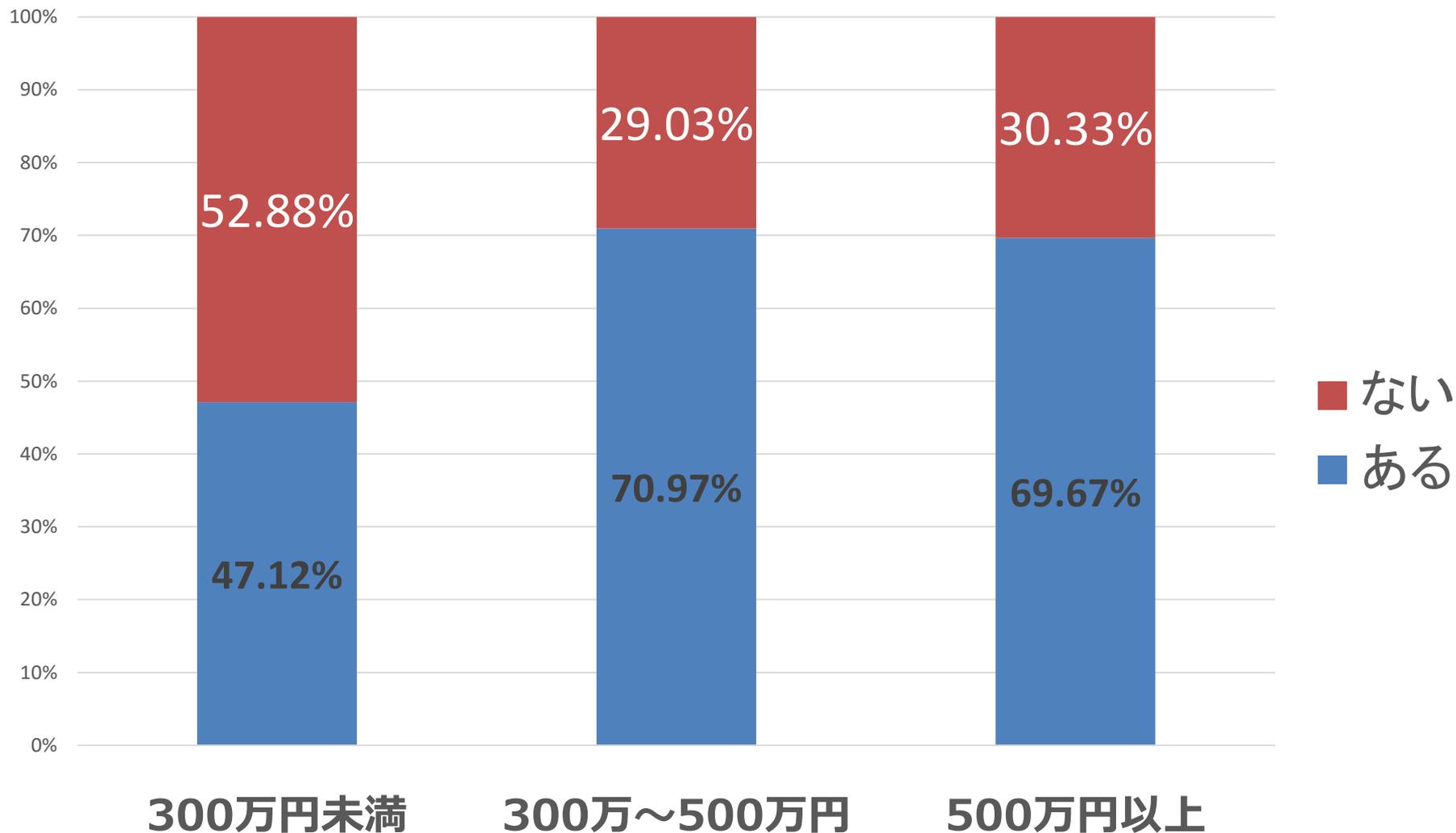
# スナック菓子



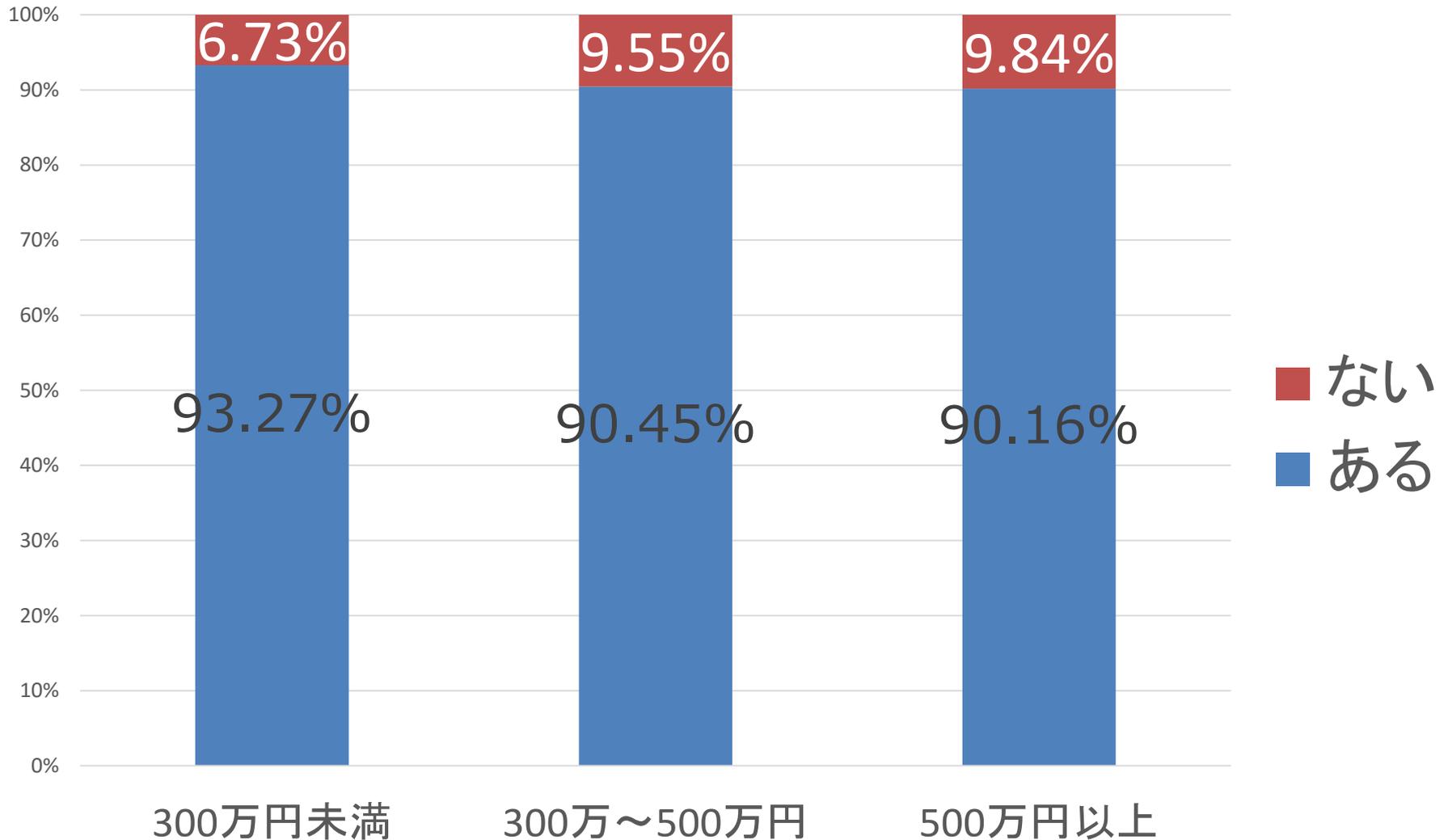
# 朝食を食べる頻度



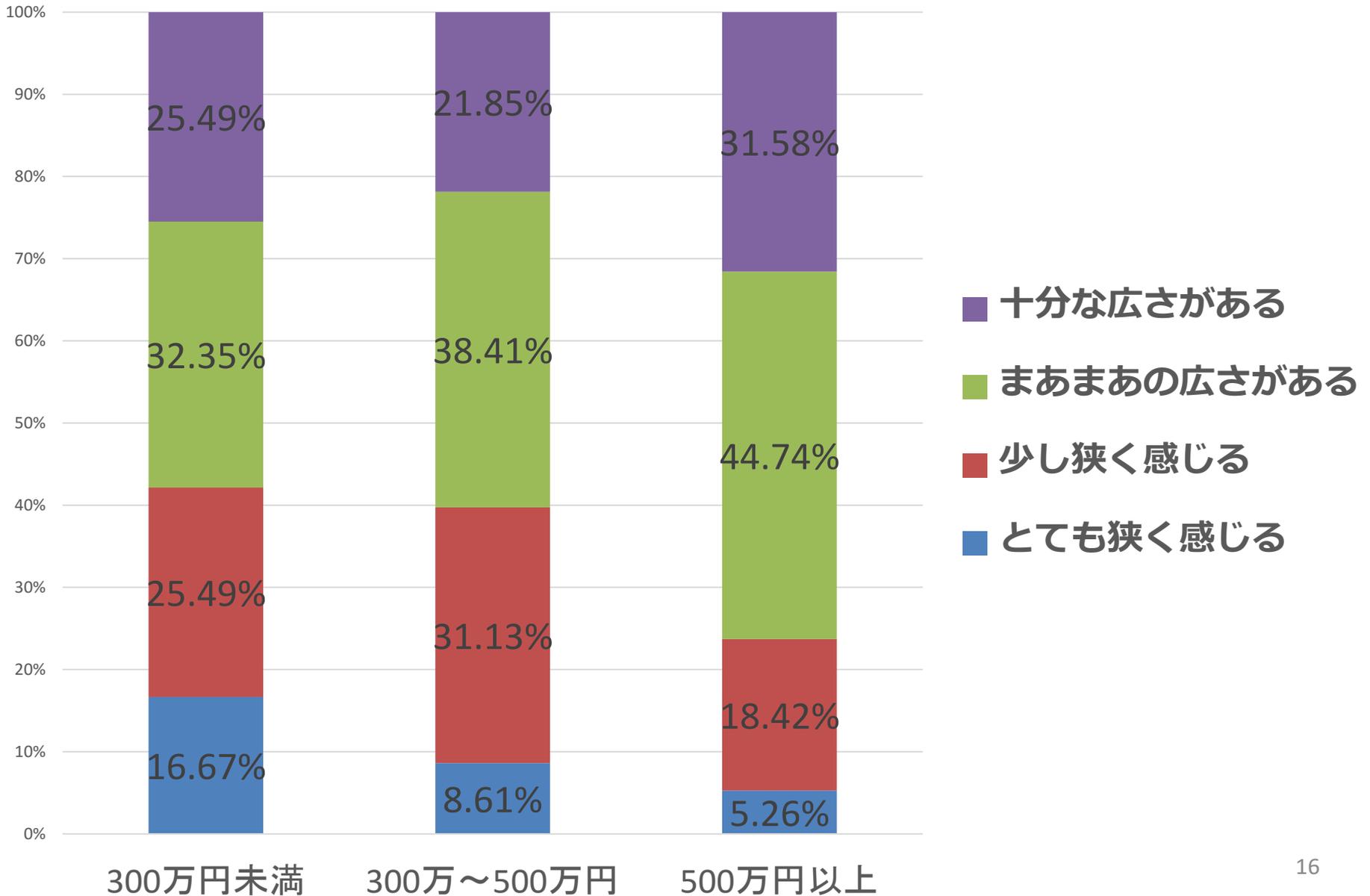
# パソコンを持っているか



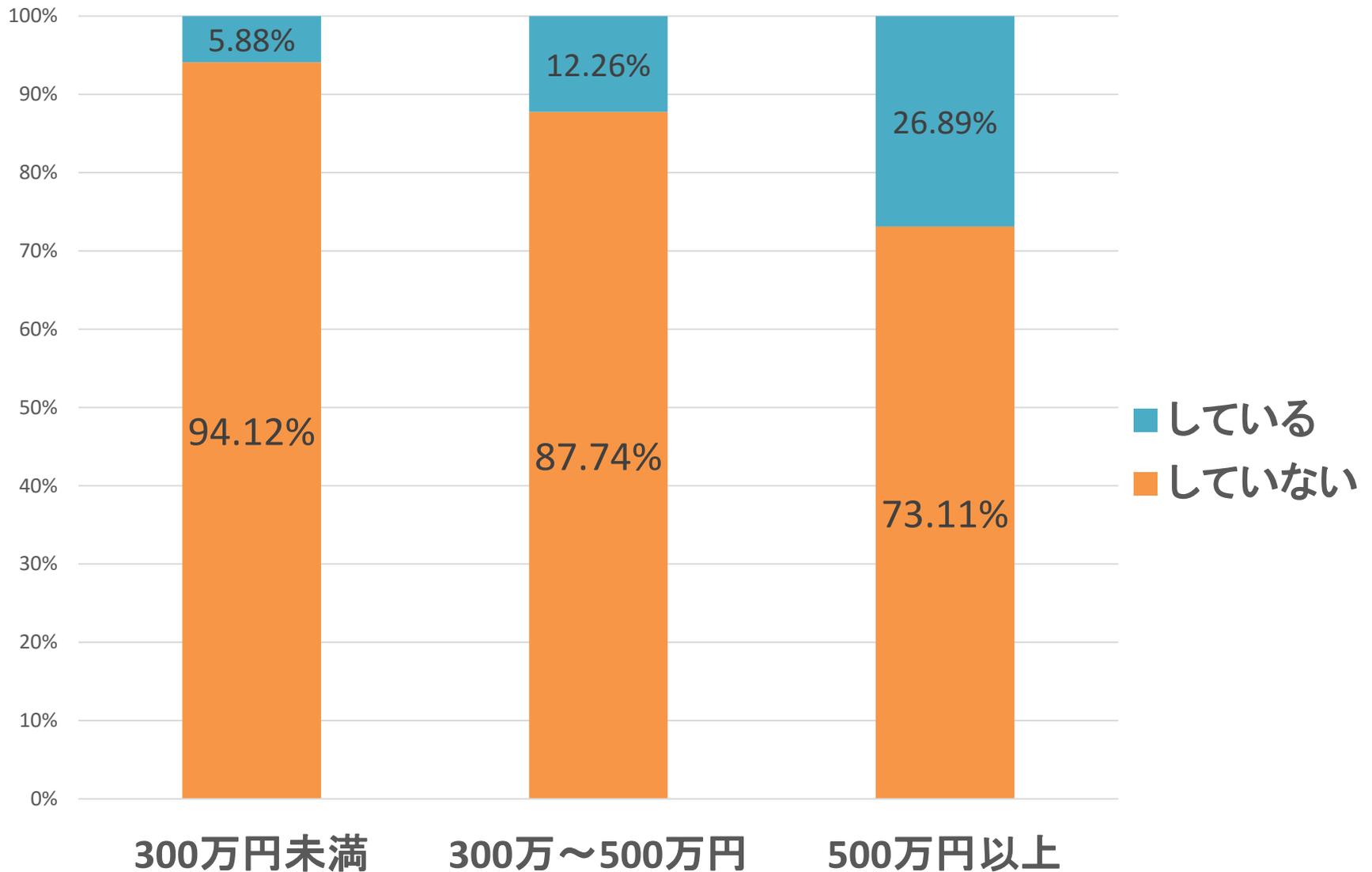
# スマートフォンを持っているか



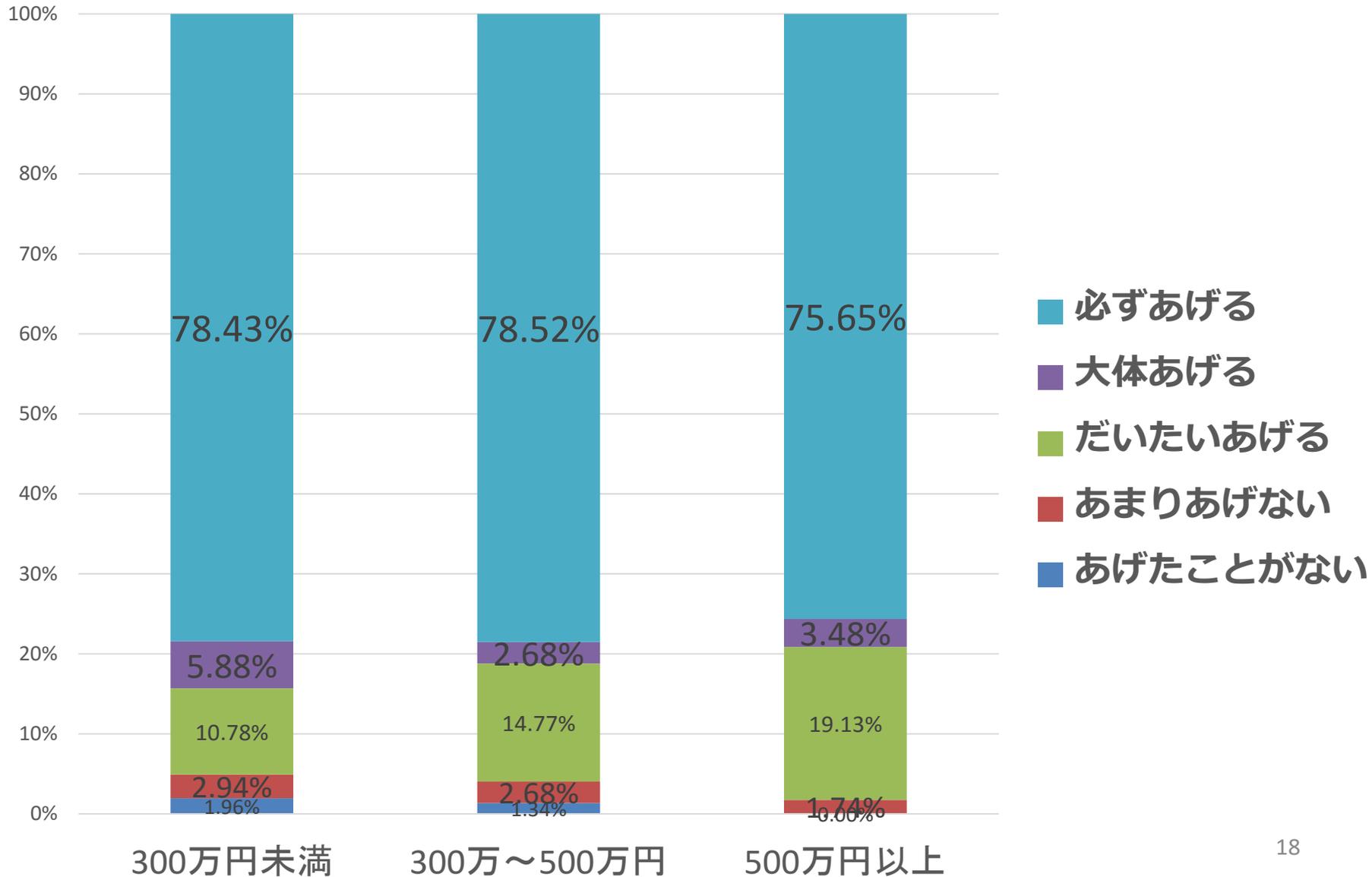
# 住居



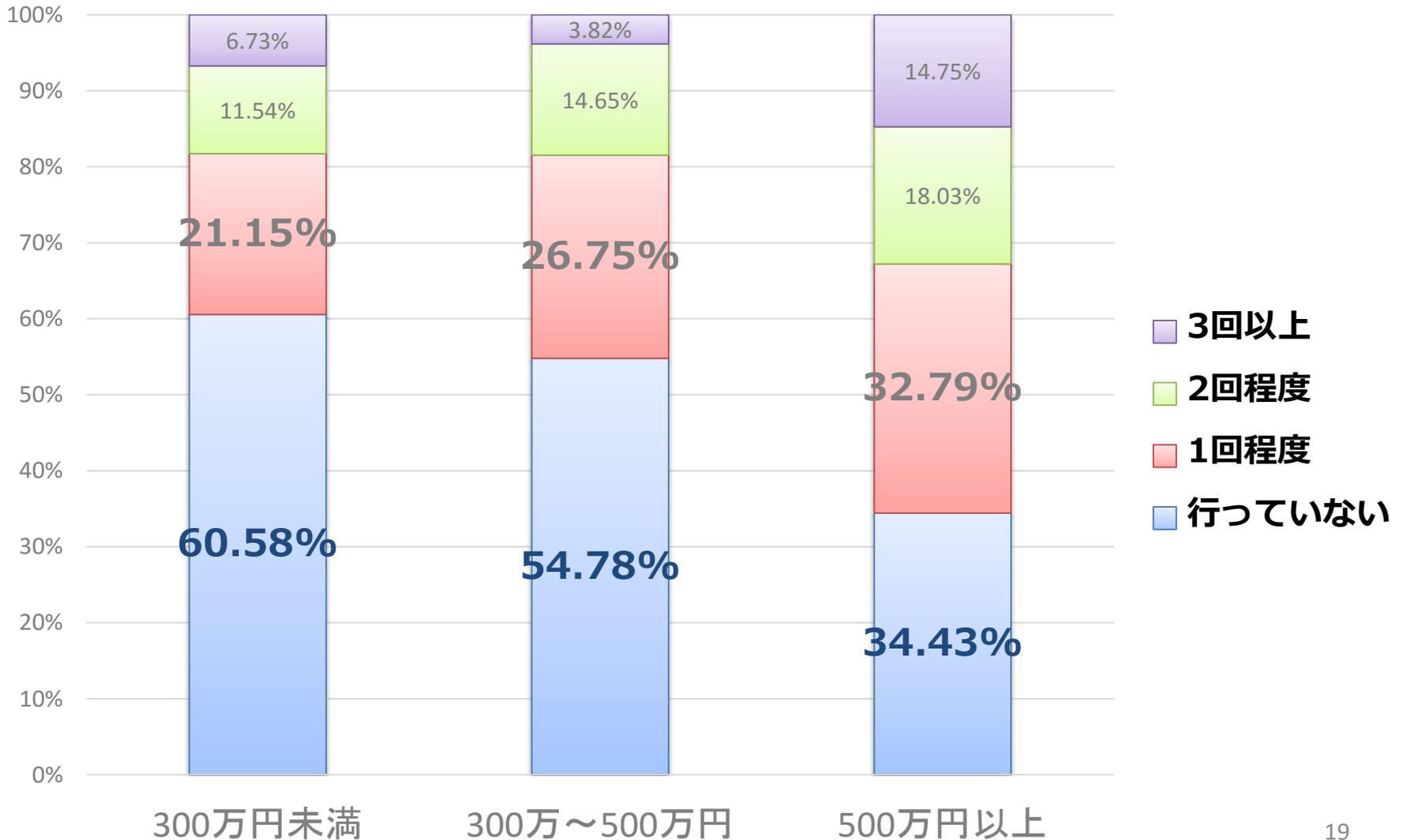
# 習い事をしている



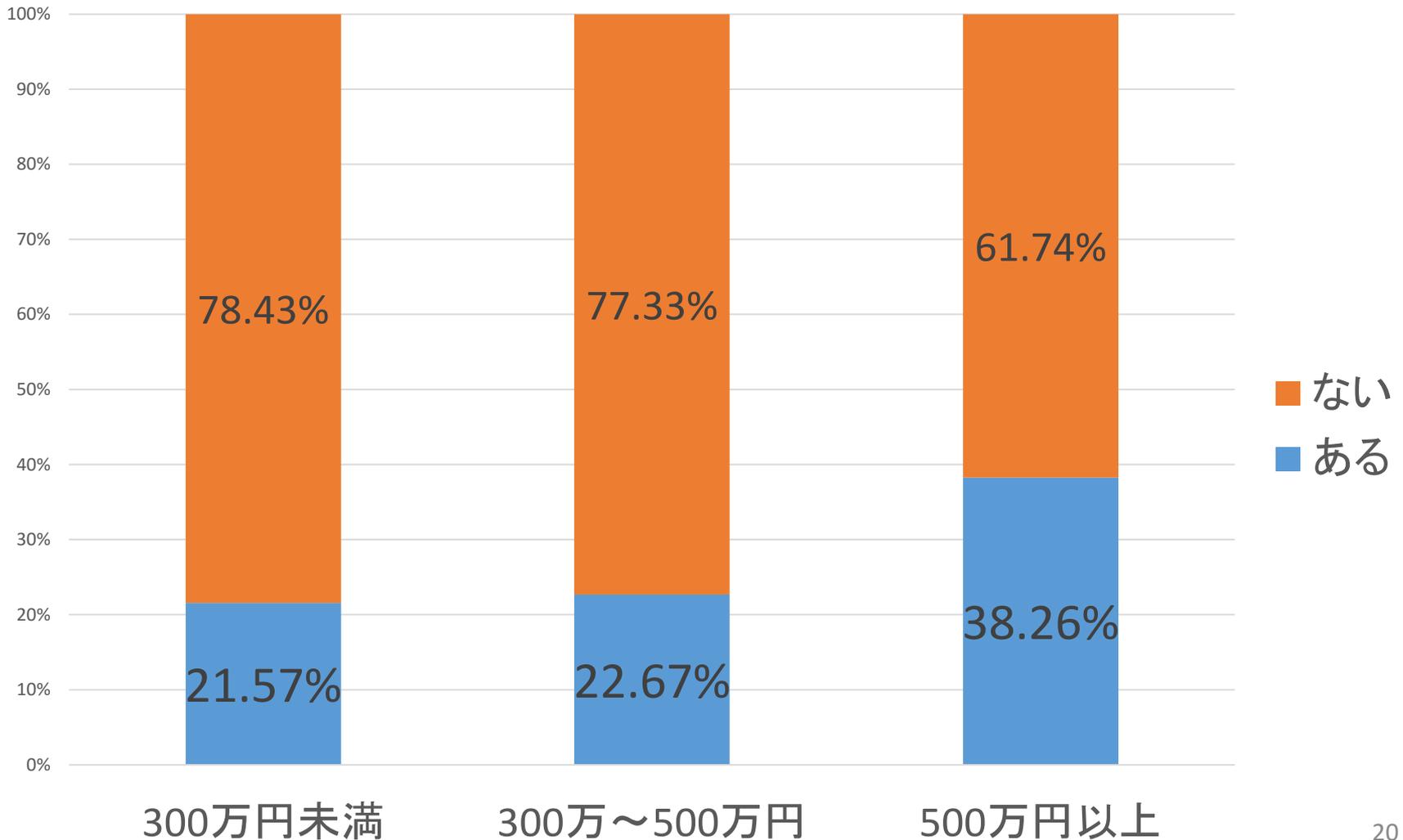
# 誕生日やクリスマスにプレゼント



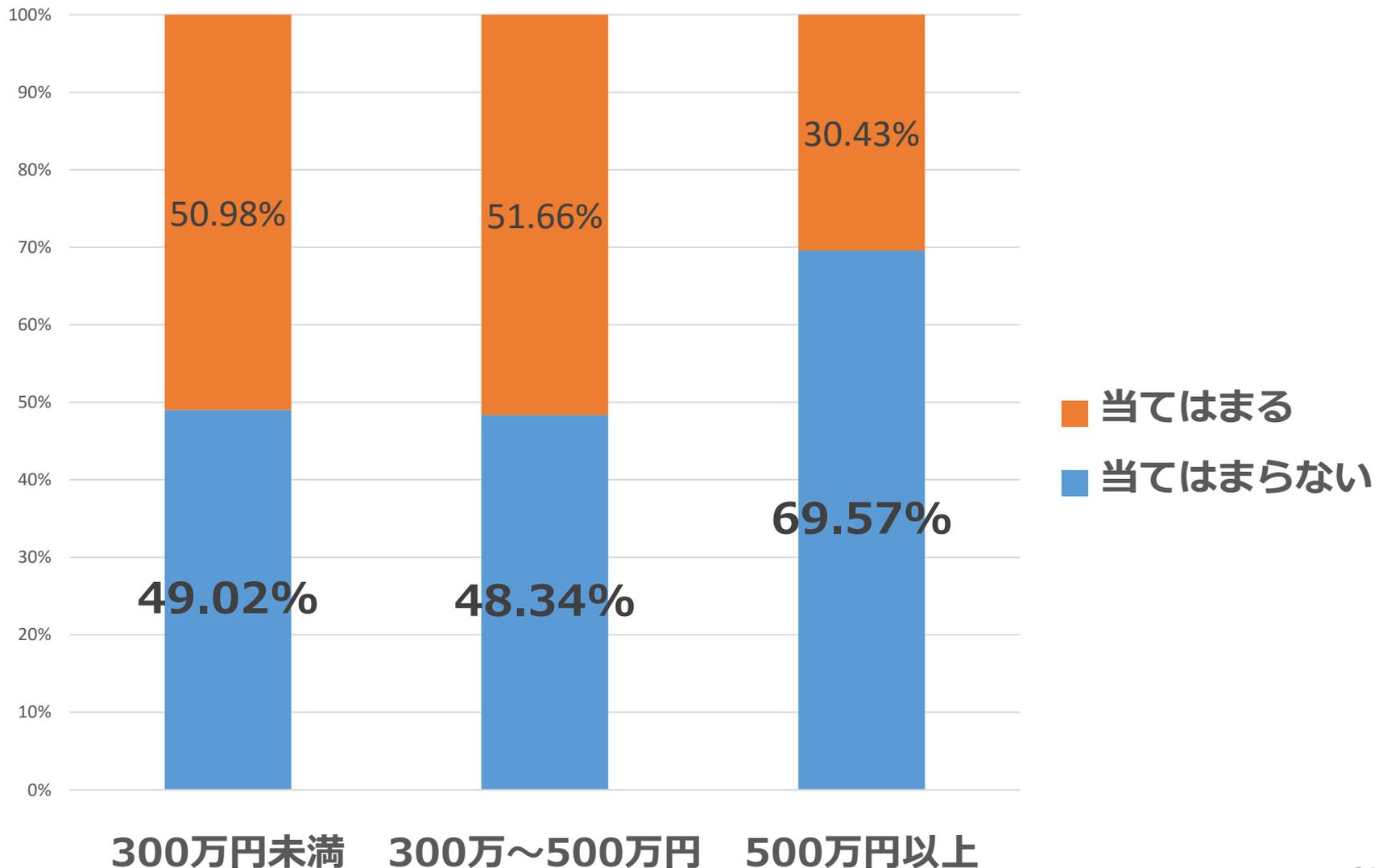
# この1年間で泊りがけの旅行に行った



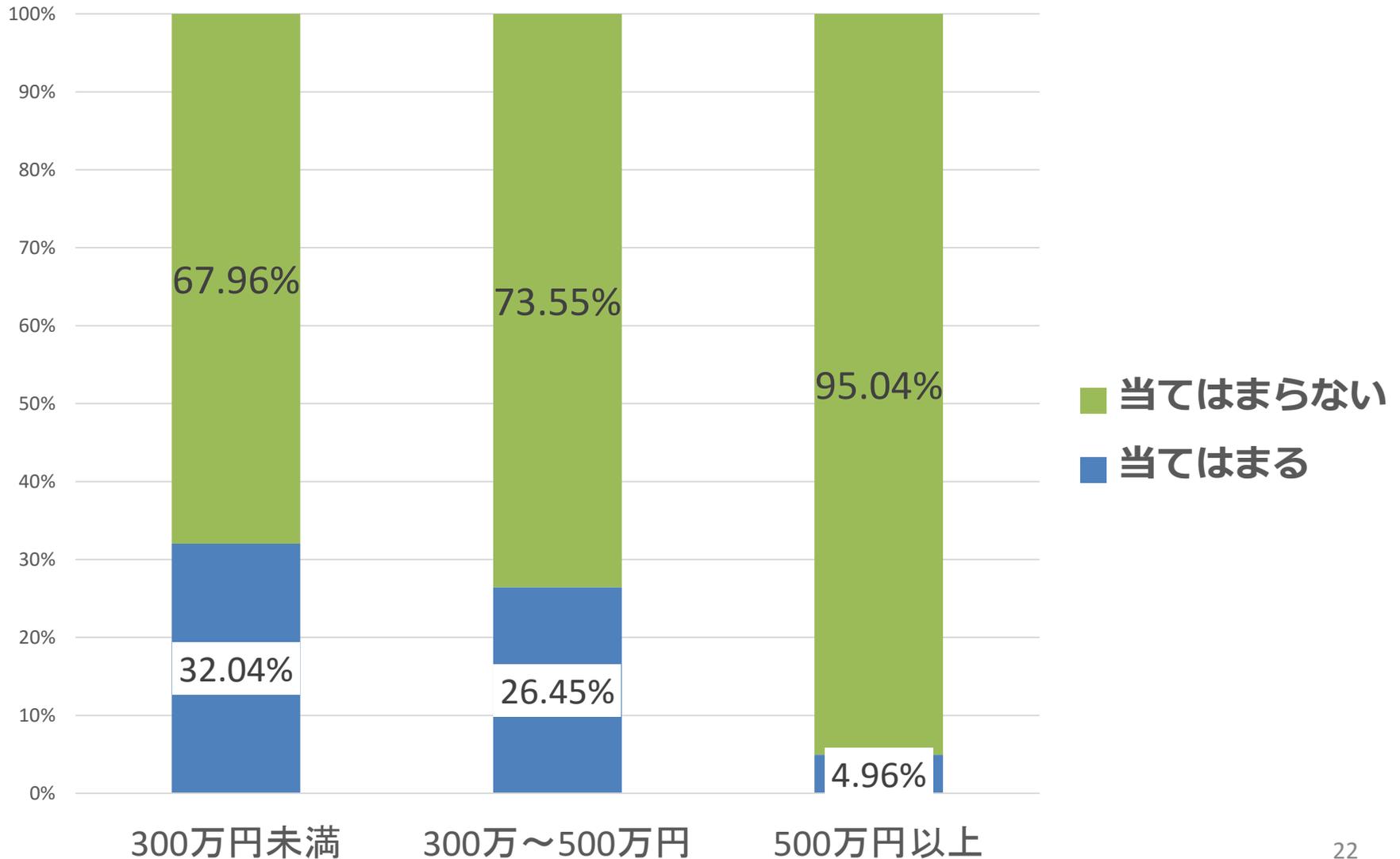
# 飛行機に乗ったことがある



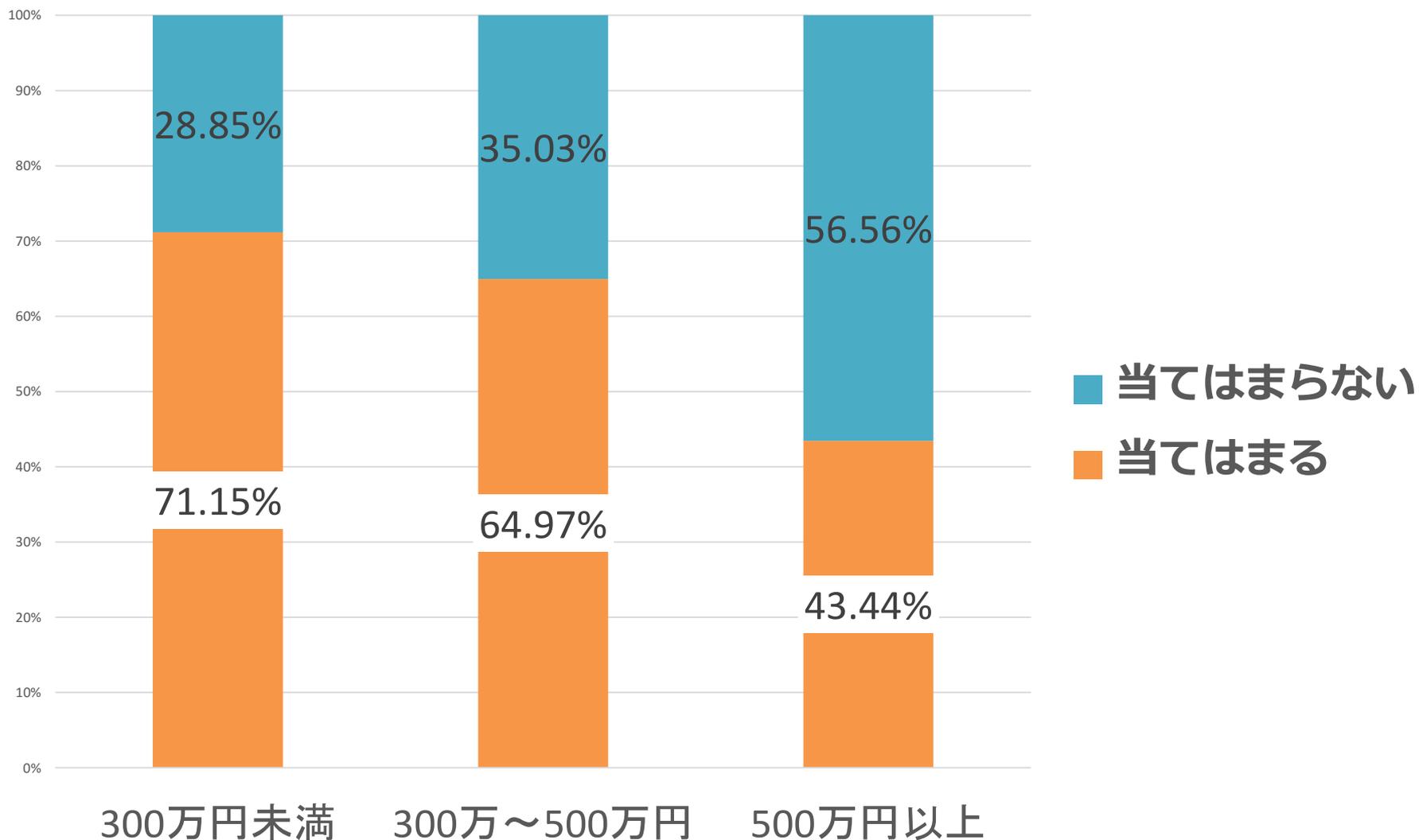
# 旅行・レジャー費用が不足している



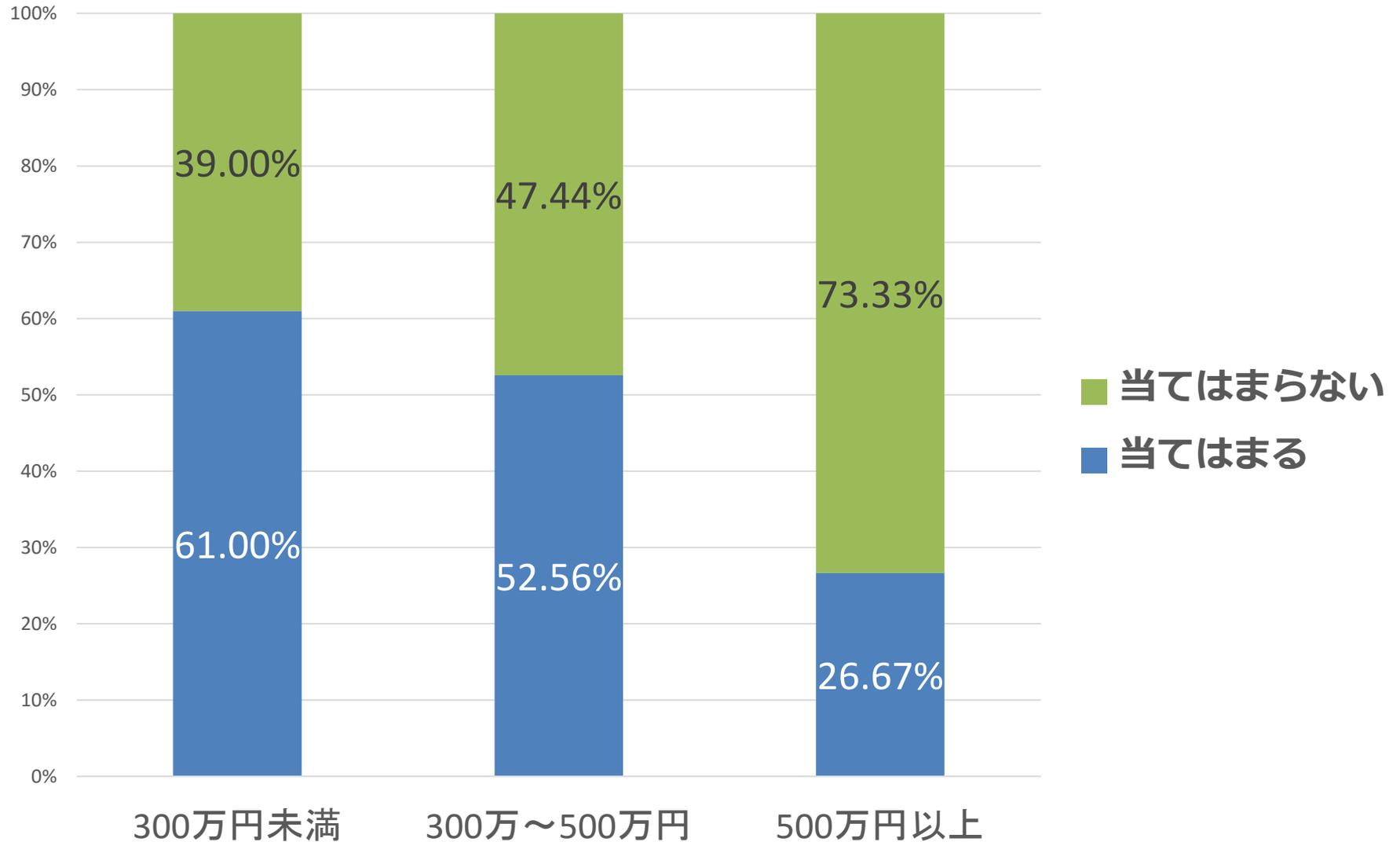
# 生活費が不足している



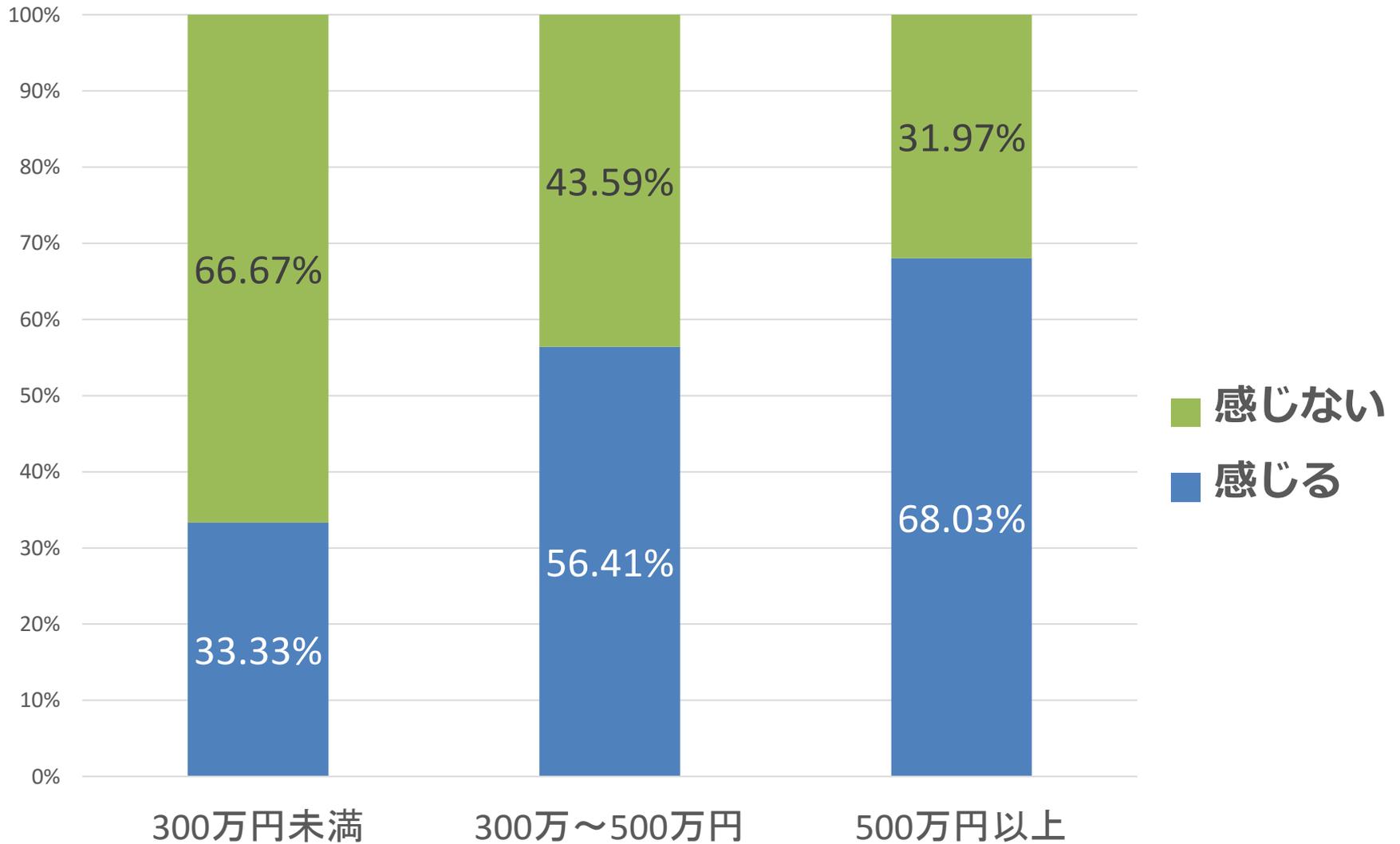
# 突然の出費のための貯金が不足している



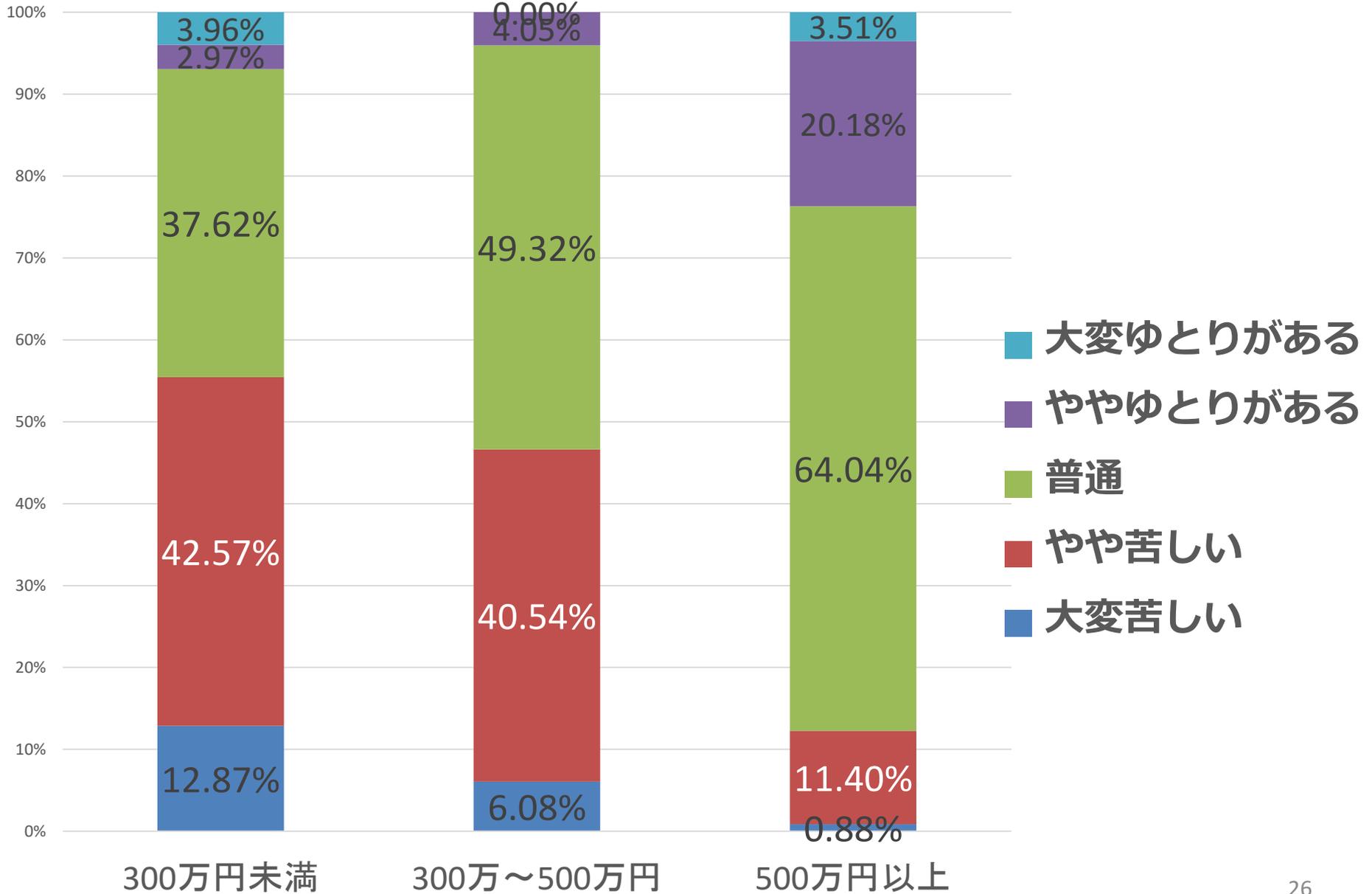
# 家計に不安・悩みがある



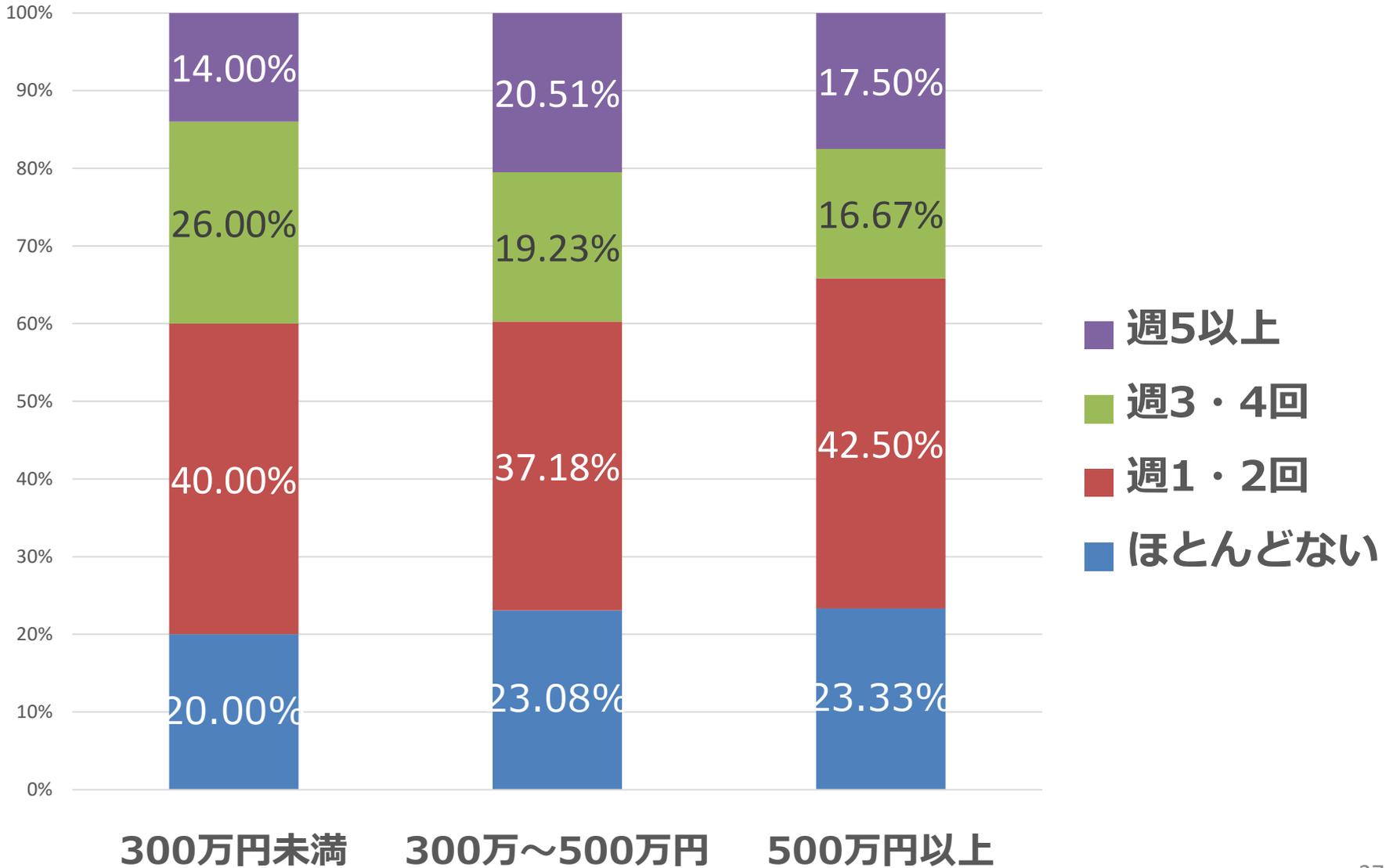
# 保育料を負担に感じる



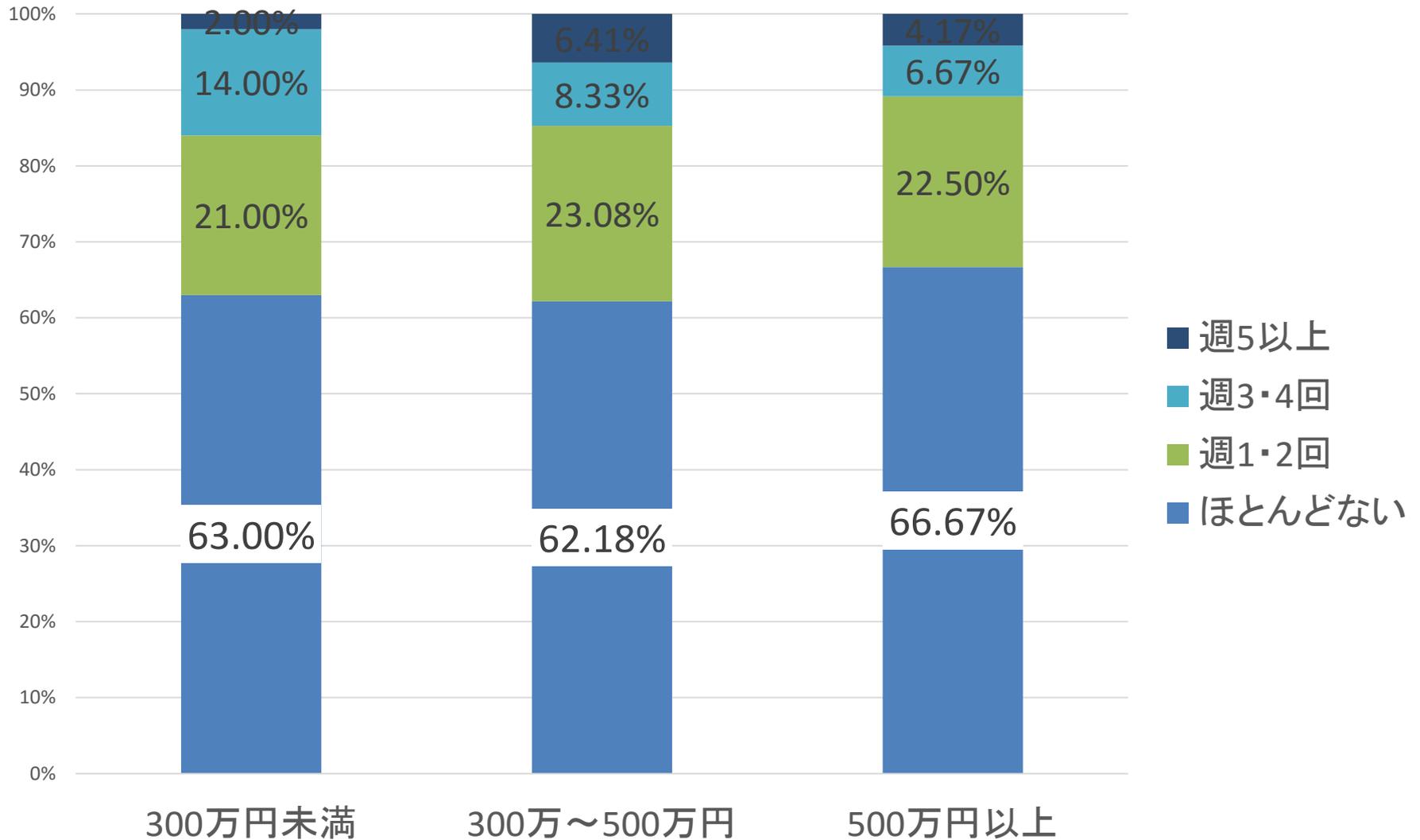
# 生活意識



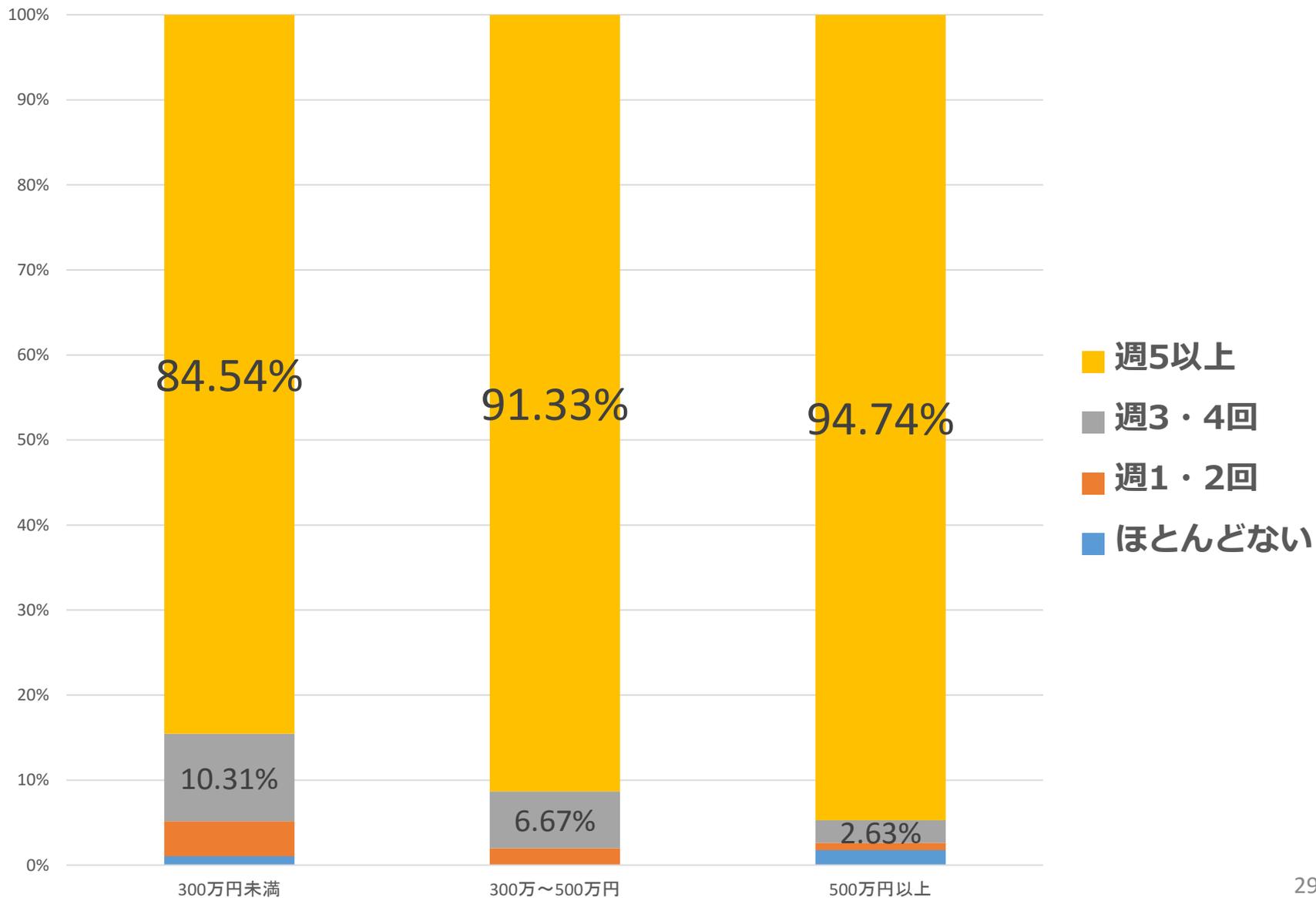
# 子どもにイライラして怒鳴る



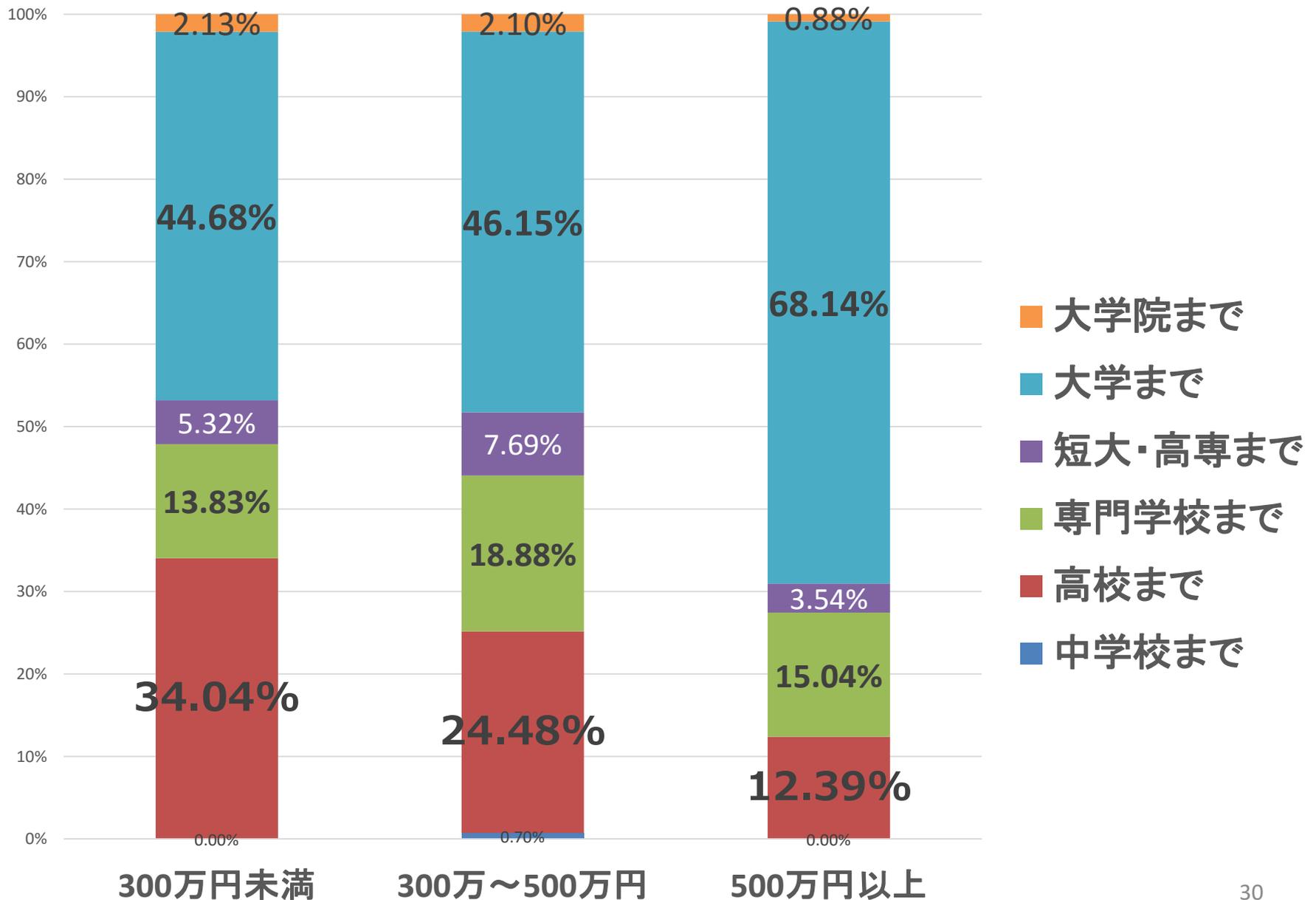
# 子どもに怒って手が出る



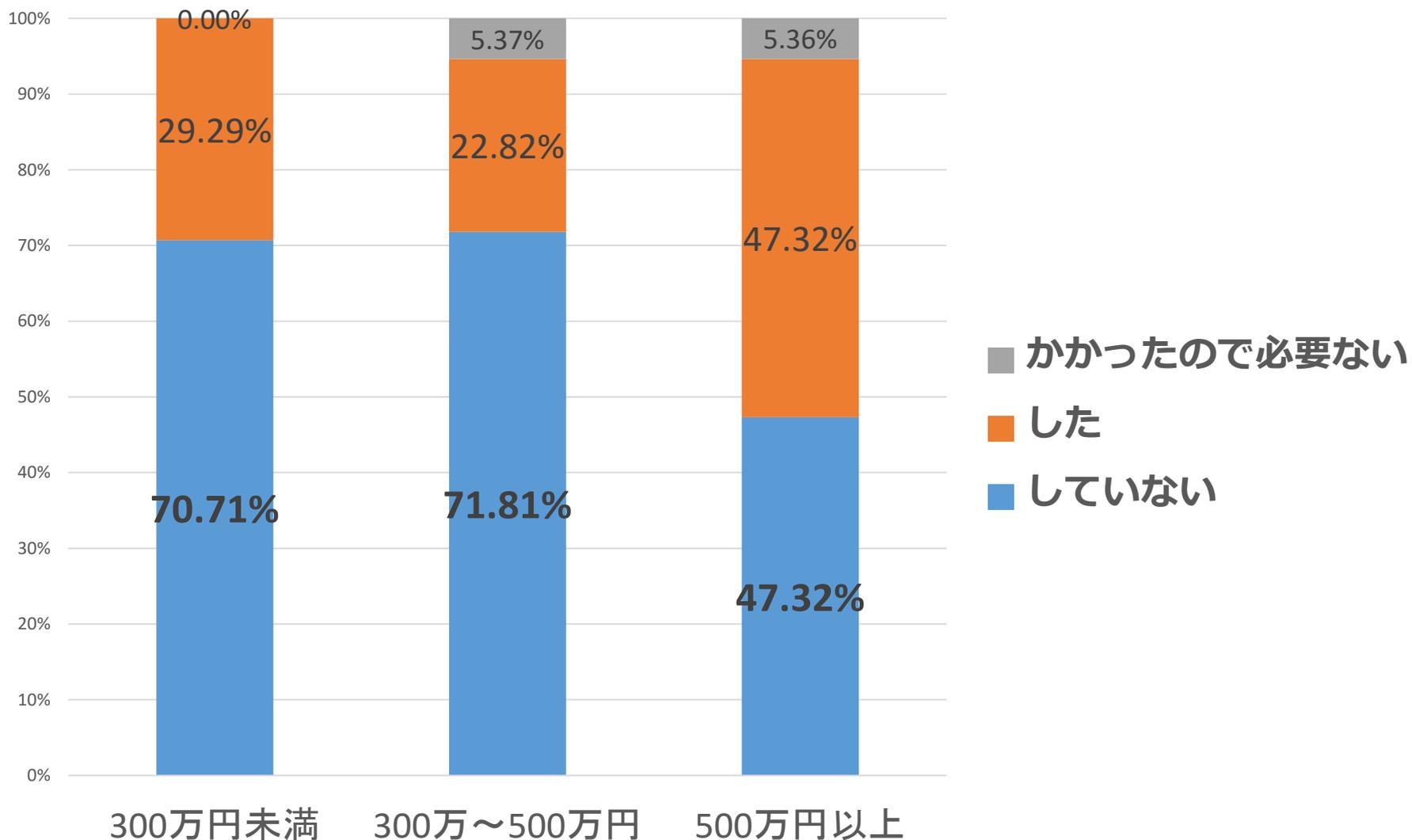
# 子どもの話を聞いてあげる



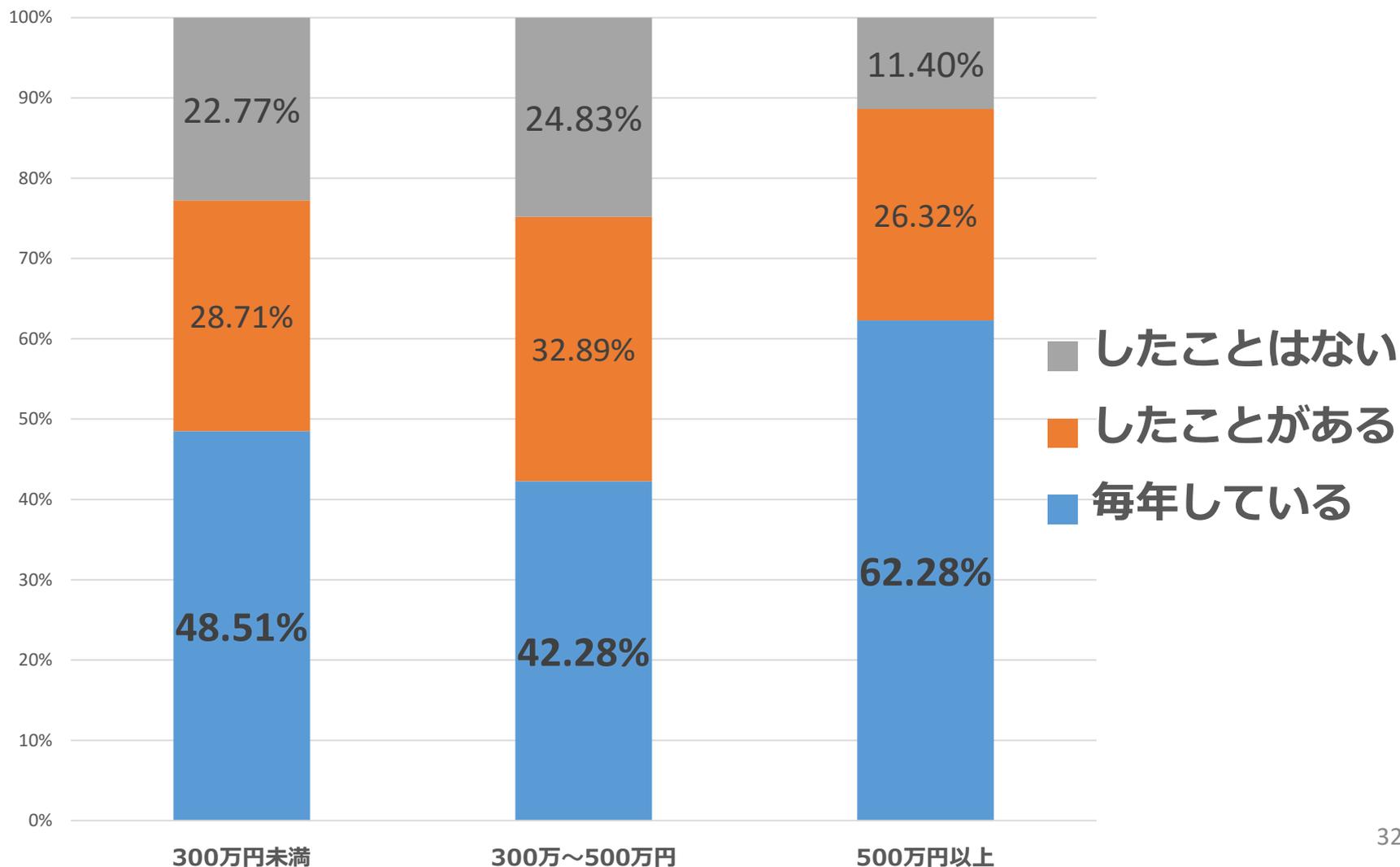
# 子どもにどこまで進学してほしいか



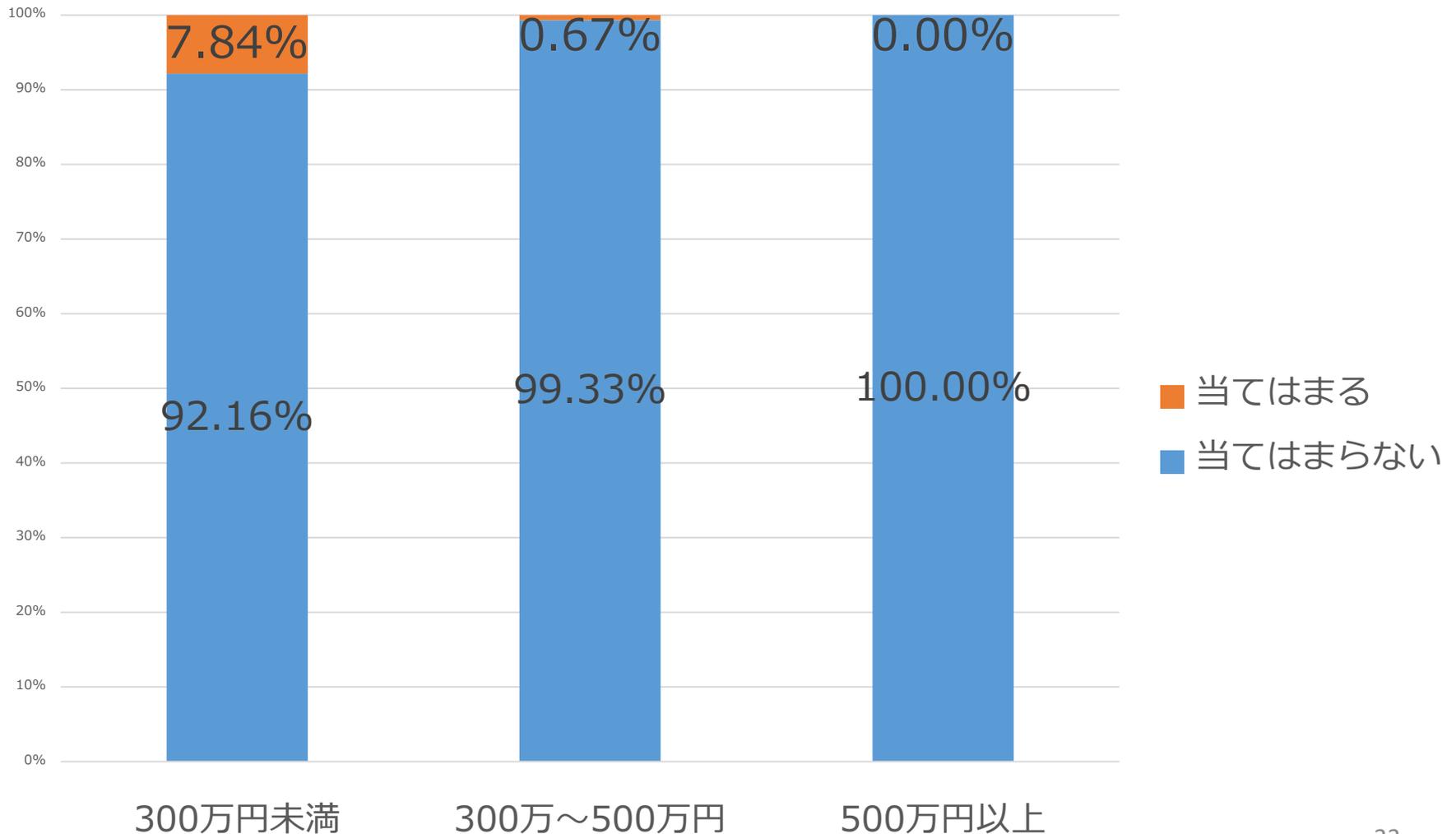
# おたふくかぜの予防接種



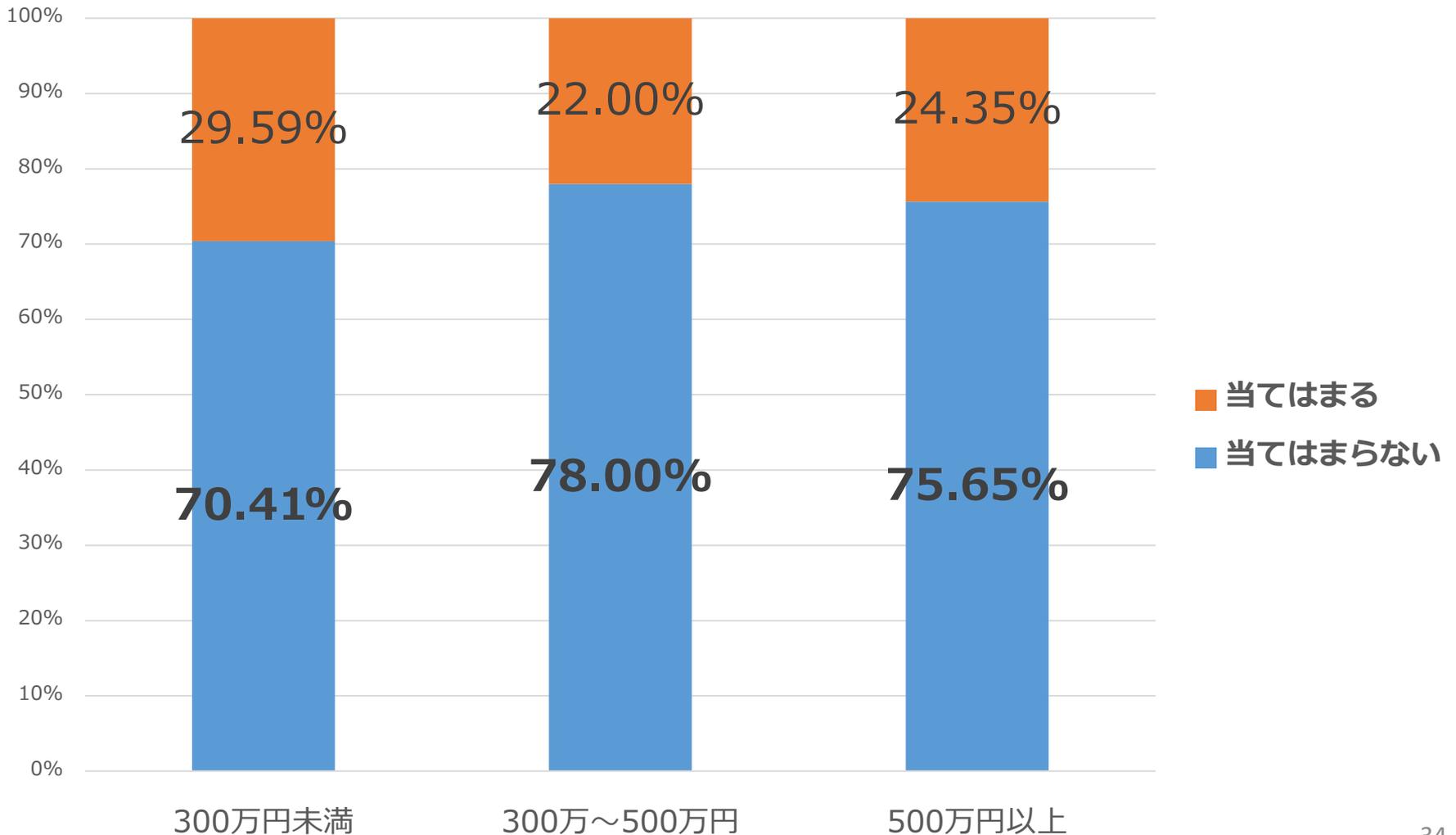
# インフルエンザの予防接種



# 経済的に厳しくて病院に行けない



# 相談相手：保育所の先生



# 調査結果より

- 衣食住（足りないわけではないが、負担は大きい）
- 医療（予防接種）
- 経験（旅行、習い事、乗り物）
- 子どもとの関わり
- 生活意識（「苦しい」）
- ・・・不平等・困窮がみられた項目、そうではない項目の混在  
→調査方法の問題、または現代的な貧困・不平等のかたち？

# 低所得乳幼児も格差

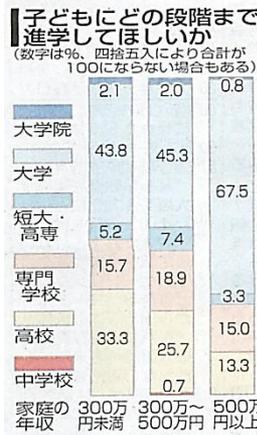
親の収入が低いほど、乳幼児期の子どもの食や医療面に困難な状況が生じている。そうした実態を、長崎大の小西祐馬准教授(児童福祉)が保育園児の保護者を対象に実施した調査で明らかにした。食が偏る、ワクチン未接種、大学進学を諦めがち…。親の経済的困窮が幼児期の子どもへの養育環境に影響している状況を裏付けた調査はほとんどなく、子どもの貧困対策に役立つだろう。

## 長崎大保護者420人調査

2014年12月～昨年2月、長崎市にある10保育所の保護者731人を対象に実施し、420人から回答を得た。世帯年収の合計が300万円未満を低所得層、300万円以上500万円未満を中所得層、500万円以上を高所得層と分類し、集計。低所得層の54%はひとり親家庭だった。その結果、朝食や夕食で「果物をほとんど食べない」のは低所得層の17.3%に

子どもに明日を食べる」は低所得層が13.5%、中所得層8.4%、高所得層7.4%。逆に「スナック菓子や週末5日以上食べる」は低所得層が13.5%、中所得層8.4%、高所得層7.4%。逆に「スナック菓子や週末5日以上食べる」は低所得層が13.5%、中所得層8.4%、高所得層7.4%。

## ワクチン接種12%、習い事21%少なく 「スタートから不平等」



高所得層7.4%だった。長崎市で医療機関にかかると、乳幼児医療費助成制度を使っても800円の自己負担が生じる。このため「経済的に厳しくて行けない」が低所得層に7.7%いた。7千円程度かかるインフルエンザワクチンを毎年接種しているのは、高所得層60.3%に対し、低所得層48.5%。おたふくかぜワクチンも高所得層は45.4%で、低所得層は28.7%だった。

音楽や水泳などの習い事をしていないのは高所得層が26.9%、低所得層は5.9%。子どもに「大学まで進学してほしい」と望む高所得層は67.5%だったのに対し、低所得層は43.8%にとどまった。

親の所得と学力の相関関係など、小学生以上の学齢期を対象にした調査はあるが、乳幼児期に焦点を当てた調査はほとんどない。乳幼児期は人間形成の土台で、基本的な生活習慣や自主性などを身に付ける時期

生じていることを示した貴重なデータだ。特に気になるのは「大学まで進学してほしい」との親の希望が24%も差があったことだ。大卒でないと就職が不利な中、親が諦め、実力のある子どもが摘まれてしまっている。どんな子にも、チャンスがあると感じられる社会であるべきだ。こうした調査を積み重ね、国や地方の貧困対策に生かしていくことが必要だ。

(下崎千加)

# アンケートに寄せられた声（自由記述）①

## ●こども〇人、年収100～200万円

パートで仕事をしているときに離婚し、その後、子供が[ある障害]と診断されました。毎週（支援機関A）へ行き、毎月（支援機関B）へ行き、とてもじゃないけど正社員で働くことも出来ません。Wワークで働いています。同居の祖母も大病を患い、身体障害者です。高齢で少しボケはじめ、たよれる人もいません。生活保護を受けると生命保険も車もダメだし。私1人の稼ぎで毎日ギリギリで生活しています。もっと親身に話を聞いてくれるところもほしいし、支援も考えてほしいと本当に思います。

## アンケートに寄せられた声（自由記述）②

- 母子世帯、子2人、年収100万未満

去年離婚をし、**母親だけで2人をちゃんと育てていけるのか時々不安**になりますが、自分の親、姉や親せき、友達に支えられて何とかやっていけてます。**自分に今よゆうが無いのかすぐイライラしてしま****います**。子供はもっと甘えたいんだろうなと思ってますが、なかなかちゃんと向き合ってあげれていません (>\_<) もっと向き合えるように頑張りたいと思います。

## アンケートに寄せられた声（自由記述）④

### ●母子世帯、子ども〇人、年収100～200万円

離婚した後、実家に戻り、祖父母と同居していますが、そのために保育料が祖父母の給料で算定され、保育料が高すぎます。来年度9月より下がる予定ですが、同居の有無にかかわらずひとり親家庭に平等に接してほしいと思います。また自分には“パパ”が居ないということを感じており、たまに顔がムツとなります。やはり父親は必要なのでしょうか。

子育てについてですが、毎日楽しく過ごし、成長する姿がステキだなと思います。**しかし、、、自分（私）に時間と心の余裕がないときにイライラしながら八つ当たりしてしまっています。どうすれば、いつも笑って、おだやかでいられますか。**

# 保育所での事例検討で出し合った意見

- 保育現場でできないことはしない、できることをやる
- まずは子ども、「子どもの最善の利益を考慮し、子どもの福祉を重視」
- 現状維持でもOK、少しでも改善されたら最高！
- 通園が途切れないこと、園に来てくれることが何よりも重要
- そのためには、否定しない・責めない・見下さない・裁かない
- 受け止める、認める、気づく、理解しようとする、共感する、肯定する
- 連絡事項を具体的にわかりやすくする、配布物をよみやすくするなどの工夫も必要（「見下されている」と誤解されぬように）
- 保護者会活動、保護者も参加する行事、クラスだより等を利用する

# 「子供の貧困対策に関する大綱」における乳幼児に関する記述

「（２）貧困の連鎖を防ぐための幼児教育の無償化の推進及び幼児教育の質の向上

（略）

また、**質の高い幼児教育を保障**するに当たっては、とりわけ小学校以降における学びとの連続性等の観点から、幼児期に取り組むべき教育の内容について検討を行い、充実を図るとともに、自治体における保幼小連携の推進や教職員の資質能力の向上のための研修の充実等の方策について検討を進める。

さらに、幼稚園教諭・保育士等による専門性を生かした**子育て支援**の取組を推進するとともに、就学前の子供を持つ保護者に対する家庭教育支援を充実するため、家庭教育支援チーム等による**学習機会の提供や情報提供、相談対応、地域の居場所づくり、訪問型家庭教育支援**等の取組を推進する。」

# 「子供の貧困対策に関する大綱」における乳幼児 に関する記述

「（保育等の確保）

（略）「待機児童解消加速化プラン」により、平成 29 年度末までに待機児童解消を目指して、保育所の整備等の取組を推進する。（略）

**また、指定保育士養成施設における養成課程において、子供の貧困をはじめ、社会福祉及び児童家庭福祉について履修することを通じ、子供の貧困に関する保育士の理解を深めるよう努める。」**

# 保育所の可能性

- ① 保育所は養護と教育を一体的に提供し、子どもの多様な活動・経験を保障する
- ② 保育所を基点にした保護者支援・家族支援の可能性
  - 毎日顔を合わせる、保育士は子どもに「成績」をつけない
- ③ 地域の子育て家族を支援する可能性（保育所は全国に24,000ヶ所）

※「貧困からの脱出」の支援を目的の一つとして生まれたのが保育所

# 保育現場で「貧困」と向き合うために

- 貧困が「見える」ようになってはきたが、保育士が子どもと親の背景にある困難、親自身の成育歴、そして社会状況を踏まえつつ、子どもと親のニーズをしっかりと見極めて適切に冷静に支援を行うことは簡単ではない
- 保育士「親としての役目を果たしていないように見える保護者」という把握・・・長時間子どもと過ごし、「子ども目線」を備えている保育者であるがゆえ
- 保育所と保護者の対立を避けるためには？
- 親の中には「貧困の連鎖」の中に生まれ落ち、放置され続けてきた結果が現在だという人も
- 「かつて、救われなかった子ども」が、いま目の前に親としているのかもしれない

# 社会全体での子育てをすすめるために

- 「少子化なのになぜ待機児童が生まれるのか？」  
→少子化になるような国だからこそ、待機児童も生まれる、待機児童を生み出してしまおうような国だからこそ、少子化になる、子どもの貧困率も上昇し続けている
- すべての根にあるのは、「子どもへの公的支出は少なくてもかまわない」「子育ては家族の責任」という「家族主義・家族依存」の社会構造
- 「社会全体での子育て」「子育ては社会の責任で」という価値観を共有しようというとき、「保育所」という場から考えていくことがひとつのヒントになるのでは